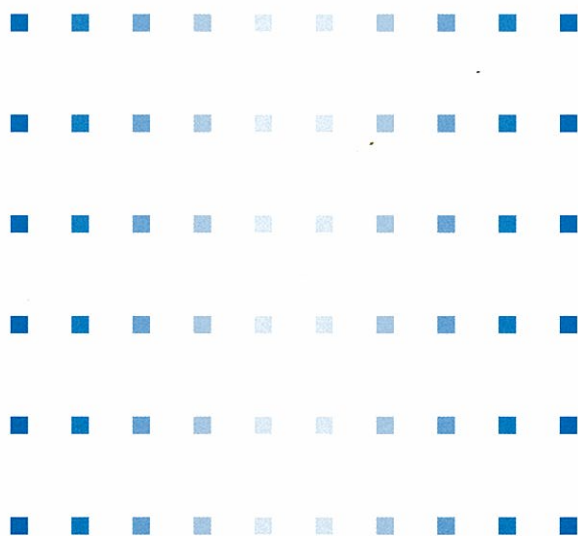


2008年度
「学生による授業評価アンケート」
報告書

2008年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会



立教大学

2009年10月

はじめに

総長 大橋 英五

本報告書は、2008年度の「学生による授業評価アンケート」の分析結果をまとめたものである。アンケートは今回で5回目を迎えた。アンケートに協力されたすべての学生、勤務員にまずは感謝したい。

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことからも明らかである。

しかしながら、開始から数年後には、繰り返しによる効果の低減を懸念する声上がり、教学改善により有効に活用できる工夫の必要性が訴えられた。

そこで2007年度には、スタート時に確認された目的のうち「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、各学部・学科等の判断により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度はこれを踏襲した。

2008年度には、アンケート結果の更なる活用と学生の責任ある回答を促すための方策についての全学的な協議も行った。この2点は、アンケートの開始当初から絶えず指摘されてきた事項である。

アンケート結果の更なる活用については、各学部等での活用状況を報告してもらい、それを全学で共有した。他学部等の事例を参考に一層の活用が図られることを期待する。

学生の責任ある回答を促すための方策については、アンケートを記名で行うことを検討した。しかし、アンケートでは率直な回答を得ることが重要であること、およびアンケート結果の質的継続性という観点から、アンケートは引き続き無記名により実施することを決定した。学生が自分たちは大学を構成する重要な一員であるという自覚を持ち、大学教育をより良くしていくために責任を持って回答するよう、更なる工夫を行い学生の意識改革を促したい。

アンケート結果に対する科目担当者による所見は、本学の特徴の一つである。「所見集」は、図書館に備え付けて学内者の閲覧に供している。加えて、2008年度にはWEB上での公開を開始した。これにより、結果の迅速なフィードバックが実現し、閲覧の利便性も向上したといえよう。授業の履修計画の一助とするなど、特に学生による活用を期待したい。

最後に、本報告書が学内、学外を問わず多くの方々に読まれ、本学のさらなる教育改善に資することを期待している。

目次

はじめに	
1. 授業評価アンケートの実施目的	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 2008年度の実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 実施科目の選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	22
4-3 理学部	24
4-4 社会学部	26
4-5 法学部	28
4-6 経営学部	31
4-7 異文化コミュニケーション学部	34
4-8 観光学部	36
4-9 コミュニティ福祉学部	38
4-10 現代心理学部	41
4-11 全学共通カリキュラム	44
4-12 学校・社会教育講座	49
5. 2008年度のまとめと今後の展望	51
6. 集計データ（資料編）	53
6-1 回答者数	53
6-2 科目開設学部等別平均値	54
6-3 「グループ集計」科目一覧	66

1. 授業評価アンケートの実施目的

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

また、実施目的は変更していないが、アンケート4年目である2007年度からは、実施対象科目の選定方針を変更した。詳しくは「1-4 2008年度の実施科目の選定方針」(p.4)を参照されたい。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能することを目指して改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、

学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そして次のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.5 参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生

による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが 1 冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次のアンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004 年度報告書より転載)

1-4 2008 年度の実施科目の選定方針

2008 年度は 2007 年度に引き続き、実施目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」ことの 2 点に比重を置いて実施した。具体的には、実施科目の選定方針を「1 教員 1 科目」に限定せず、各学部が必要に応じて選定することを可能とした。

選定の例としては、授業の目標・内容が一定程度共通で複数コマ展開している科目（「基礎演習」や「入門演習」など）や必修・選択など科目の属性による選定、大人数科目などが挙げられる。詳細については、「2-3 実施科目の選定方針」(p. 11)を参照されたい。

なお、2004 年度から 2006 年度までの 3 年間は、1 教員 1 科目の原則で実施した。

2008年度前期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード 101 開講曜日 火 担当者 立教 太郎 履修者数 101
 科目名 5122 教室 5122 回数 26

単純集計結果 (5:大いに思う, 4:思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70~89% 3:50~69% 2:30~49% 1:30%未満) []
- 2) この授業に積極的に参加した []
- 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた []
- 4) 授業をききかたげにして春履修の勉強をした []
- 5) シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立つ []
- 6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間) []

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) 履きやすい話し方だった []
- 2) 各回の授業内容の量が適切だった []
- 3) 各回の授業のねらいは明確だった []
- 4) 各回の授業内容は明確だった []
- 5) 十分な静肅性が保たれた []
- 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった []
- 7) 板書のしかたが適切だった []
- 8) 映像計算教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的だった []
- 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた []

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

- 1) 自分にとって新しい考え方・発想 []
- 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識 []
- 3) 自分で調べ、考える姿勢 []
- 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味 []

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

- 1) わかりやすい授業だった []
- 2) 授業全体の目標が明確だった []
- 3) 学問的興味をかきたてられた []
- 4) この授業を受けて満足した []

授業評価に対する担当教員の所見

記述による評価に対する担当教員の所見

改善に向けた今後の方針

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から30分間、もしくは授業終了前の30分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

アンケートの質問紙は、5段階による評価方式の設問を23設問、記述による評価欄を2箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もある。例えば、「板書のしかたが適切だった」との設問は、板書を使用しない授業を行う教員には必要がない、といったケースである。実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1学部あたり最大で7設問を設定できるようにした。2008年度は、文学部（2設問）、経済学部（6設問）、理学部（1設問）、観光学部（7設問）、全学共通カリキュラム（3設問）が学部設問項目を設定した（p. 10 参照）。

2008年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード	本学学部生
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 (1) (2) (3) (4)
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	本学学部生以外 (00)
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。 4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 科目コードにマークミスがあった場合にはこの調査票は無効となる。 6. 折りまげたり汚したりしないこと。
(0) (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)	

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	(5) (4) (3) (2) (1)
2) この授業に積極的に参加した	(5) (4) (3) (2) (1)
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	(5) (4) (3) (2) (1)
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	(5) (4) (3) (2) (1)
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (次の中から選んでマークしてください) 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	(5) (4) (3) (2) (1)
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 各回の授業内容の量が適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 各回の授業のねらいは明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 各回の授業内容は明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
5) 十分な静粛性が保たれた	(5) (4) (3) (2) (1)
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
7) 板書のしかたが適切だった	(5) (4) (3) (2) (1)
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	(5) (4) (3) (2) (1)
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	(5) (4) (3) (2) (1)
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 自分で調べ、考える姿勢	(5) (4) (3) (2) (1)
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	(5) (4) (3) (2) (1)
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	(5) (4) (3) (2) (1)
2) 授業全体の目標が明確だった	(5) (4) (3) (2) (1)
3) 学問的興味をかきたてられた	(5) (4) (3) (2) (1)
4) この授業を受けて満足した	(5) (4) (3) (2) (1)

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

〔評価欄〕

V. 学部等による設問

1) 別途の指示に従ってマークしてください	1)	⑤	④	③	②	①
2) 別途の指示に従ってマークしてください	2)	⑤	④	③	②	①
3) 別途の指示に従ってマークしてください	3)	⑤	④	③	②	①
4) 別途の指示に従ってマークしてください	4)	⑤	④	③	②	①
5) 別途の指示に従ってマークしてください	5)	⑤	④	③	②	①
6) 別途の指示に従ってマークしてください	6)	⑤	④	③	②	①
7) 別途の指示に従ってマークしてください	7)	⑤	④	③	②	①

VI. 記述による評価

1) この授業で良いと思った点があれば書いてください。

2) この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。

ご協力ありがとうございました

2008 年度立教大学授業評価アンケート

V. 学部等による設問

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、別紙『2008 年度立教大学授業評価アンケート』裏面の「V. 学部等による設問」〔評価欄〕にマークしてください。

- 5: とてもそう思う 4: そう思う 3: どちらともいえない 2: あまりそう思わない
1: そう思わない

(文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

(経済学部)

基礎演習

- 1) みんなの前で自分の意見を言えるようになった
- 2) 経済に関する文献を読めるようになった
- 3) レジюмеやレポートを作成できるようになった

情報処理系科目 情報処理入門、情報処理入門2、経済情報処理A、B、政策情報処理A、B、
経営情報処理A、B、財務情報処理A、B

- 4) ワードプロソフト(Word)を使いこなせるようになった
- 5) 表計算ソフト(Excel)を使いこなせるようになった
- 6) WEB上からデータをダウンロードし、分析できるようになった

(理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた。

(観光学部)

- 1) わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ（観光学部以外の学生は答えないこと）
- 2) わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う
- 3) わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している
- 4) わたしは、旅行することが好きだ
- 5) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 7) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

(全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 実施科目の選定方針

「学生による授業評価アンケート」は、2004年度に開始して以降3年間、講義科目を対象に1教員1科目の原則で実施してきた。2008年度は、2007年度に引き続き、目的を「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」ことに比重を置き、各学部・学科等の必要性に応じて選定を行った。

実施科目は、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）を対象とし、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目は対象外とした。

<科目選定方針一覧>

学部等	科目選定方針
文学部	(1)各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2)文学部基幹科目 (3)各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1)「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない。また、2006年度まで実施してきた科目は原則として実施しない (2)共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年目科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理学部	(1)数・化・生命理学科は、各教員1科目実施 (2)物理学科は、全ての講義科目を原則とする。大学院の併置科目は除く (3)原則として複数担当科目は除く
社会学部	(1)「講義科目1教員1科目」を原則とする (2)必修科目、選択必修科目は原則として全て実施する (3)産業関係学科の科目は実施しない
法学部	入門科目を選定し、その後「講義科目1教員1科目」を原則として選定する
経営学部	(1)講義系（リテラシー関連の実習含む）全科目で実施する (2)基礎ゼミで実施する
異文化コミュニケーション学部	C S科目を除く全科目
観光学部	(1)学部で設置意図にそって分析し易いように科目を選ぶ (2)概ねこれまでの実施科目数を目度に、共通科目（必修科目）、共通基幹科目（選択必修科目）、学科基幹科目（必修科目）の全科目と学科基幹科目（選択必修科目）のうち、1・2がある科目については、2だけを対象とする (3)関連基礎科目や語学系科目、専門演習については対象外とする (4)アジア人財観光イニシアティブ科目を加えた
コミュニティ福祉学部	(1)1教員1講義科目を原則とする 選択に際し、複数教員担当科目は除き、福祉学科・コミュニティ政策学科は3年次配当科目を優先する (2)下記の科目を追加する ①2008年度に開講初年度の講義科目 ②スポーツウエルネス学科2008年度開講科目。ただし複数教員担当科目を除く (3)演習・実習系の科目は対象としないが、1年次の基礎演習では実施する
現代心理学部	(1)「総合展開科目」全科目 (2)初年次教育科目 (3)専任教員は、講義科目1教員1科目。このほか、映像身体学科2年次「基礎演習」
全学共通カリキュラム	全カリ総合Aのうち講義系科目を担当する教員1名につき年間1科目の実施
学校・社会教育講座	「講義科目1教員1科目」

2-4 実施科目数

実施予定科目数、実施科目数、所見票の提出数に関して、科目担当者を専任と兼任に分けて下の表にまとめた。全学の実施率は 99.3% (1,109/1,117)、所見票提出率は 78.4% (870/1,109) であった。

通年科目で前期と後期で異なる科目担当者がそれぞれアンケートを実施した場合は、前期 1 科目および後期 1 科目としてカウントした。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	168	101	67	167	101	66	129	78	51
経 済 学 部	88	50	38	88	50	38	85	50	35
理 学 部	106	49	57	105	49	56	94	41	53
社 会 学 部	130	62	68	130	62	68	102	47	55
法 学 部	65	24	41	63	24	39	53	18	35
経 営 学 部	161	73	88	160	73	87	103	52	51
異文化コミュニケーション学部	27	15	12	27	15	12	24	13	11
観 光 学 部	75	27	48	73	26	47	57	16	41
コミュニティ福祉学部	131	79	52	130	79	51	111	68	43
現 代 心 理 学 部	52	26	26	51	25	26	32	13	19
全学共通カリキュラム	215	108	107	212	108	104	169	84	85
学校・社会教育講座	65	47	18	65	47	18	63	45	18
合 計	1283	661	622	1271	659	612	1022	525	497

注) 所見票提出数は、2009年6月5日現在

2-5 実施期間

実施は、①授業が進行した後半の時期が好ましい、②試験の時期は避けることから、下記の期間とした。下記期間内に実施できない場合は翌週に実施した。

前期 : 2008年6月25日(水)から7月1日(火)

後期 : 2008年12月8日(月)から12月13日(土)

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	6,534	4,467	4,640	2,925	11,001	7,565
経 済 学 部	1,702	2,971	1,454	1,750	4,673	3,204
理 学 部	3,479	3,424	2,226	1,962	6,903	4,188
社 会 学 部	7,564	7,793	4,535	4,327	15,357	8,862
法 学 部	8,452	9,398	3,238	3,112	17,850	6,350
経 営 学 部	8,235	8,620	4,239	4,158	16,855	8,397
異文化コミュニケーション学部	667	334	507	284	1,001	791
観 光 学 部	4,099	5,014	2,641	3,154	9,113	5,795
コミュニティ福祉学部	6,449	5,036	4,047	2,711	11,485	6,758
現 代 心 理 学 部	3,266	3,219	2,149	1,925	6,485	4,074
全学共通カリキュラム	18,688	17,902	10,832	9,194	36,590	20,026
学校・社会教育講座	3,003	661	2,291	482	3,664	2,773
合 計	72,138	68,839	42,799	35,984	140,977	78,783

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、「所見集」としてまとめ、下記の図書館において学内者の閲覧に供している。

また、2008年度からは、学生の利便を図るため、イントラネット上での公開を開始した。

池袋本館および新座図書館：全科目

人文科学系図書館：文学部、全学共通カリキュラム

社会科学系図書館：経済・社会・法・経営・異文化コミュニケーション学部、
全学共通カリキュラム

自然科学系図書館：理学部、全学共通カリキュラム

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

アンケート実施後1~2ヶ月に下記の集計結果をWEB上に掲載し、所見の執筆を依頼した。

- ① 集計結果票 (p.16 参照)
- ② 「記述による評価」一覧票
- ③ アンケート元データ

3-2 学部等

1) 集計の方針

- ① 学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。ただし、昨年度と科目選定方針が同じ、かつ1教員1科目実施を原則としている学部等（理学部、法学部、学校・社会教育講座）は、学部等平均値について年度間比較を行う。
- ② 学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 科目開設学部等別の集計

① 回答者に関する集計

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、回答率を算出した。

② 設問項目別平均値

学部等、学科等、授業規模（回答者数）、学年別に設問項目別平均値を算出した。学部等平均値については、5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、昨年度と科目選定方針が同じ、かつ1教員1科目実施を原則としている学部等は、学部等平均値の年度間比較を行った。（学部等平均値は、資料編 pp.54-65 参照）

③ 設問項目間の相関係数

学部等別に設問項目間の相関係数を算出し、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」について、他の設問項目との関連をみた。

3) グループ集計

学部等が独自に設定した基準によりアンケート実施科目をグループ化し、設問ごとに5段階評価の回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した（pp.17-18 参照）。

2008年度前期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	開講曜日	火	担当者	立教 太郎	履修者数	101
科目名	開講時間	1	教室	5122	回答数	26

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない, 無回答)

5	4	3	2	1	無回答	エラー	
回答者数、()内はパーセント							平均
							1から5の数字の平均

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度あてはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	17 (65%)	5 (19%)	3 (12%)	1 (4%)	0 (0%)	0		
2) この授業に積極的に参加した	9 (35%)	9 (35%)	6 (23%)	2 (8%)	0 (0%)	0	0	3.96
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4 (15%)	7 (27%)	6 (23%)	5 (19%)	4 (15%)	0	0	3.08
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4 (15%)	10 (38%)	8 (31%)	2 (8%)	2 (8%)	0	0	3.46
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立つ	8 (31%)	11 (42%)	6 (23%)	0 (0%)	1 (4%)	0	0	3.96
6) 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	3 (12%)	2 (8%)	4 (15%)	5 (19%)	12 (46%)	0	0	2.19

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度あてはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	10 (42%)	9 (38%)	4 (17%)	1 (4%)	0 (0%)	2	0	4.17
2) 各回の授業内容の量が適切だった	11 (42%)	12 (46%)	2 (8%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.27
3) 各回の授業のねらいは明確だった	9 (36%)	8 (32%)	6 (24%)	0 (0%)	2 (8%)	1	0	3.88
4) 各回の授業内容は明確だった	9 (35%)	11 (42%)	4 (15%)	1 (4%)	1 (4%)	0	0	4.00
5) 十分な静肅性が保たれた	20 (77%)	6 (23%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.77
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7 (27%)	12 (46%)	4 (15%)	3 (12%)	0 (0%)	0	0	3.88
7) 板書のしかたが適切だった	6 (23%)	7 (27%)	7 (27%)	2 (8%)	4 (15%)	0	0	3.35
8) 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	4 (16%)	4 (16%)	9 (36%)	2 (8%)	6 (24%)	1	0	2.92
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	12 (46%)	6 (23%)	4 (15%)	4 (15%)	0 (0%)	0	0	4.00

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

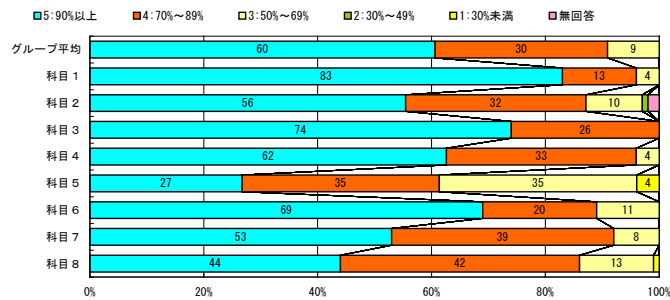
1) 自分にとって新しい考え方・発想	14 (54%)	7 (27%)	2 (8%)	3 (12%)	0 (0%)	0	0	4.23
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	13 (50%)	7 (27%)	4 (15%)	2 (8%)	0 (0%)	0	0	4.19
3) 自分で調べ、考える姿勢	7 (27%)	8 (31%)	10 (38%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	3.81
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	14 (54%)	6 (23%)	5 (19%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.27

IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度あてはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	13 (50%)	9 (35%)	2 (8%)	1 (4%)	1 (4%)	0	0	4.23
2) 授業全体の目標が明確だった	11 (42%)	8 (31%)	5 (19%)	0 (0%)	2 (8%)	0	0	4.00
3) 学問的興味をかきたてられた	13 (50%)	6 (23%)	6 (23%)	1 (4%)	0 (0%)	0	0	4.19
4) この授業を受けて満足した	12 (46%)	8 (31%)	2 (8%)	3 (12%)	1 (4%)	0	0	4.04

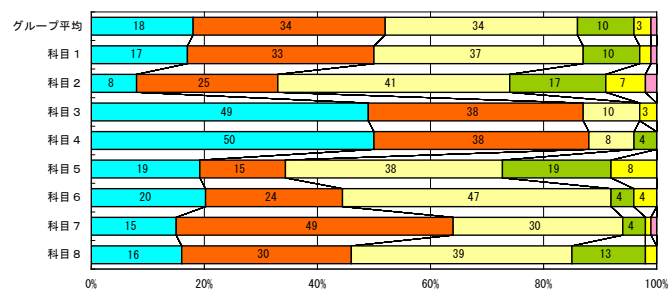
設問別帯グラフ (5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 無回答)

I-1 授業全体を通じての出席率



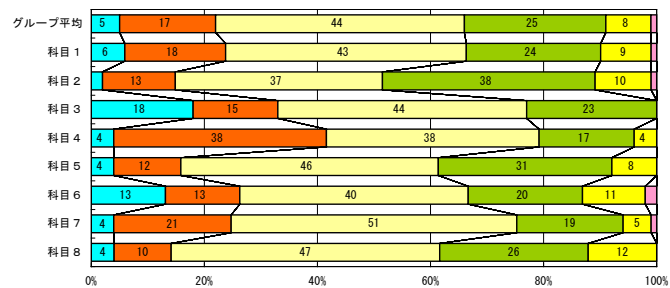
	回答者数	平均
グループ平均	621	4.5
科目1	127	4.8
科目2	104	4.5
科目3	39	4.7
科目4	24	4.6
科目5	26	3.8
科目6	45	4.6
科目7	150	4.5
科目8	106	4.3

I-2 この授業に積極的に参加した



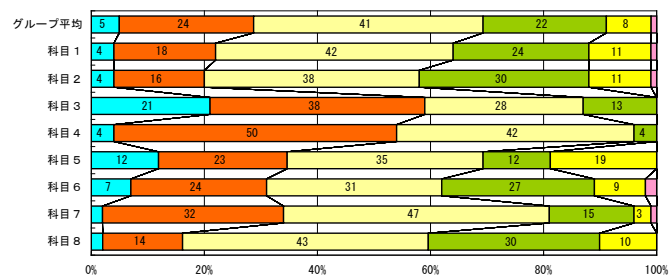
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.6
科目1	127	3.5
科目2	104	3.1
科目3	39	4.3
科目4	24	4.3
科目5	26	3.2
科目6	45	3.5
科目7	150	3.8
科目8	106	3.5

I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



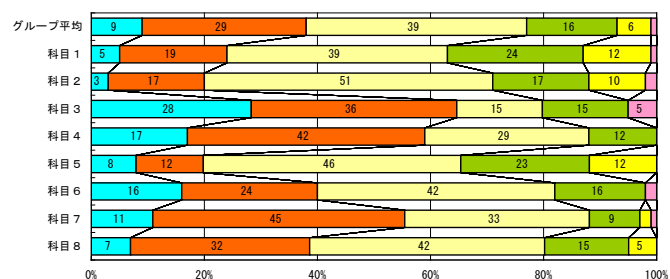
	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.9
科目2	104	2.6
科目3	39	3.3
科目4	24	3.2
科目5	26	2.7
科目6	45	3.0
科目7	150	3.0
科目8	106	2.7

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした



	回答者数	平均
グループ平均	621	2.9
科目1	127	2.8
科目2	104	2.7
科目3	39	3.7
科目4	24	3.5
科目5	26	3.0
科目6	45	2.9
科目7	150	3.1
科目8	106	2.7

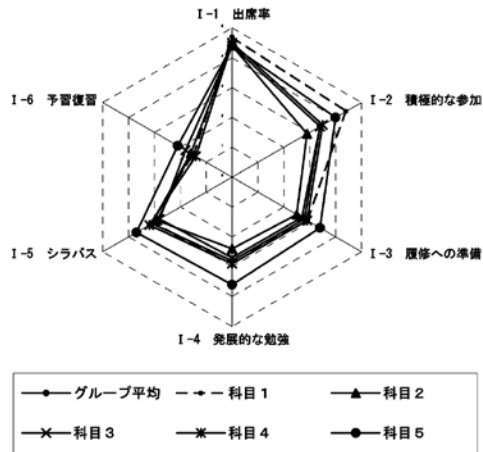
I-5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った



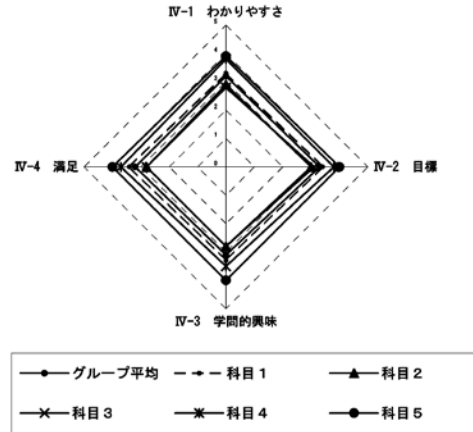
	回答者数	平均
グループ平均	621	3.2
科目1	127	2.8
科目2	104	2.9
科目3	39	3.8
科目4	24	3.6
科目5	26	2.8
科目6	45	3.4
科目7	150	3.5
科目8	106	3.2

平均値のレーダーチャート

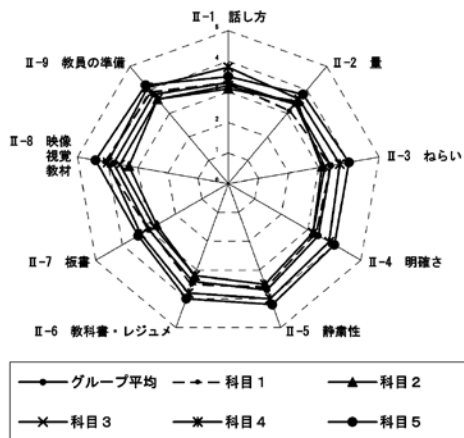
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



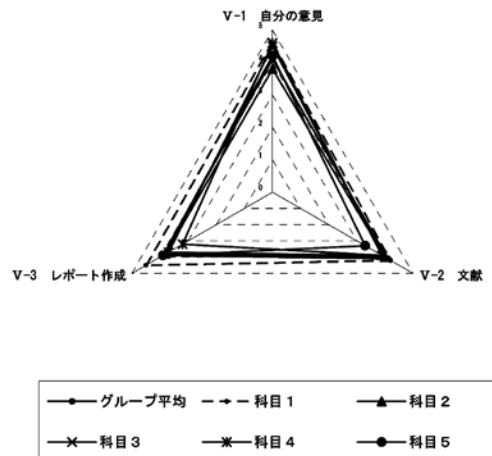
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか



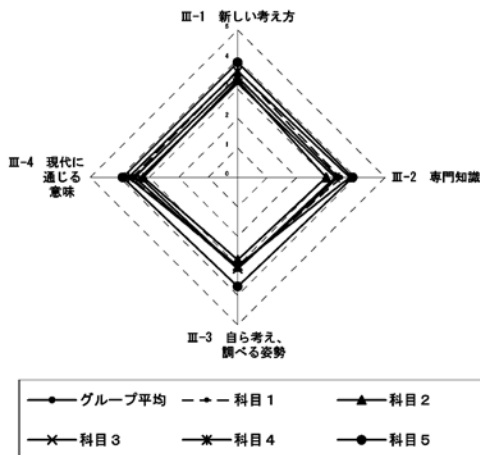
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



V. 学部等による設問（経済）



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いに思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

<I-1>

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50～69%
- 2: 30～29%
- 1: 30%未満

<I-6>

- 5: 3時間以上
- 4: 2～3時間
- 3: 1～2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、各科目の集計結果と各教員の執筆した所見票をもとに、各学部等が執筆した。

学部等総評の構成は、下記の 2 つのうちのいずれかを原型とするか、もしくは両者を適宜組み合わせたものとした。

<グループ集計を実施しなかった学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」、「記述による評価に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見」、「否定的評価として多い意見」の集約）
5. 今後の改善に向けて

<グループ集計を実施した学部等>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. グループ集計にみられる結果（「グループ集計の分類」、「学科や履修者数、同一名称科目等、グループ集計の分類により項目立て」）
4. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2007年度同様、下記の方針で科目を選定した。

(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）

- ① 1年次必修科目
- ② 1年次で履修可能な科目
- ③ 2年次必修科目
- ④ 2年次で自動登録となる科目

(2) 文学部基幹科目

(3) 各学科・専修で必要と認める科目

全体として導入教育を主要な対象とし、その成果を見ようとしている。文学部基幹科目も、主なアンケート対象とした基幹科目 C は文学部学生に対する導入的・基礎的講義科目群として位置づけられており、1年次で履修可能である。

2. 集計データにみられる結果

IVの総合的な評価は学部平均値がいずれも 3.7 前後で、おおむね高い評価を得ている。関連の分析において示されたとおり、II3「授業のねらいの明確さ」、II4「授業内容の明確さ」、III1「自分にとって新しい考え方・発想」との関連が強いことは、個別の科目において改善の目安となるであろう。

I 学生の取り組み方では、I3「十分な準備」、I4「発展的な勉強」についての学部平均値がいずれも 3.11 と低めで、I6「予習復習」は 2.07 と低い。授業規模別で見ると、アンケート対象科目の多くを占める 50 名以下の科目では I3 が 3.52、I4 が 3.55、I6 が 2.77 で、それ以上の規模の講義科目に影響された数値であることがわかる。ただ、I6 の数値は 50 名以下においてもなお高いとは言い難い。

II 授業の進め方では II7「板書」、II8「映像視覚教材」について低めの数値だが、50 名以下の演習形式授業ではそもそも両者を用いない授業が多い。設問自体が不適切とする教員所見が多かった。

受講者数、教室規模の適切性を問う V 学部等による設問では、平均 4.0 以上の高いポイントであるのに、151 名以上の科目においては V2「受講者数」が 3.63 と低めに出ているのが目を引く。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

学科・専修別など非常に細かいグループ分けが設定されているが、今後なお洗練が必要と思われる。各グループの分類意図は、以下のとおりとなろう。

1～4：1年次対象入門演習（前期）、5～7：2年次対象演習（前期）、8：基幹科目等1年次も履修可能な講義科目（前期）、9・10：各専修で必要と認めた文学講義（前期）、11：1年次履修可能な古典語（前期）、12：情報処理（前期）、13：講義科目（後期）、14・16：2年次対象演習等（後期）、15：1年次対象入門演習（後期）、17：情報処理等（後期）。

3-2 1年次対象入門演習

科目ごとのばらつきもあり一概にはいえないが、I6「予習復習」のグループ平均値は3.0前後である。導入教育として勉学習慣を身につけさせるという目的を考えると、もう少し高い数値が期待されるだろう。

3-3 2年次対象演習

I6の値が2点台のグループが多い。1年次の演習よりも概して減少していることが注意される。担当教員の所見にも、この数値を不本意とするものが見られた。

3-4 基幹科目

教員所見を見るに、一部の大人数基幹科目には私語等の問題が深刻であり、人数制限を求める例も見られる。集計結果や項目間相関においては、大人数授業であることや静粛性が保たれないことと総合評価との関連は認めにくい。しかし、集計に表れないからといって、一部の深刻な問題を看過することもできないだろう。

4. 今後の改善に向けて

本年度は、導入教育の充実という観点から科目選定を行い、アンケートを実施した。IV総合評価は、1年次入門演習、2年次演習科目のグループでは4問とも4.0を上回る数値が多く、おおむね順調に実施されていることがわかる。

ただし、I6の結果に注目したところ、予習復習時間の確保に関してはなお課題があることがうかがわれた。この項目自体は総合評価との関連は強くない。にもかかわらず注目したのは、導入教育として期待される自主的・発展的学習への足がかりとしての役割において、予習復習時間の確保がまず前提条件をなすと考えられるからである。とくに、2年次での必修あるいは自動登録の科目において1年次科目よりも予習・復習時間が少ない。これが継続的に確認される傾向であるとすれば、改善課題として取り組む必要があるであろう。来年度以後も、基本的には同じ科目とグループを用いたアンケートを継続したい。

なお、アンケートの設問に、少人数の演習科目に不適合なものが含まれることについて、多くの教員が不満の所見を述べた。そうした設問については担当教員各自において度外視すればよいともいえるが、結果が出ていると気になるのも人情である。これらは一定の条件で集計から外すか、あるいは、授業の性質上無視してよい設問がある旨、所見票の執筆依頼に一言添えるだけでも、教員のストレスは減るであろう。

また、所見票に記された個々の教員の提案を精査し、早急な対応が必要なものを汲み取るしくみも必要と思われる。答えさせっぱなしで、次年度の授業でも自分の指摘した問題が何ら改善されていなければ、教員の意欲が失われかねないからである。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2008 年度も前年度に引き続き、初年次導入教育の充実の観点から科目を選定した。すなわち、共通シラバスを用い、授業の目標及び内容に共通性を有し、複数コマ展開されている科目、及び積み上げ方式の1年次配当科目を中心に以下の15科目を選定した。

経済学、経済数学入門、簿記、統計学2、情報処理入門、情報処理入門2、経済情報処理A、経済情報処理B、政策情報処理A、政策情報処理B、経営情報処理A、経営情報処理B、財務情報処理A、財務情報処理B、基礎演習。

これらの科目のうち、情報処理入門、経済情報処理A、政策情報処理A、経営情報処理A、財務情報処理A、基礎演習、情報処理入門2については、グループ集計を行うとともに学部等による質問(「自分の意見の提示」「経済文献の読解」「レジュメ・レポートの作成」「ワープロソフトの利用」「表計算ソフトの利用」「データ分析」)を設けた。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

大部分の調査項目において、平均値は3.60前後と高い数値であった。4.00を上回る項目と3.00を下回る項目が各々数例あり、それは全て「学生自身の授業への意識・姿勢」を示す設問群に集中していた。特に高い数値を示したのは、「授業全体を通しての出席率」で4.67であった。これは、1年次科目が多かった(学年別回答者数の8割を1年生が占める)ことや、出席管理を厳しく行っている実習系科目を選定したことが一因として考えられる。

反対に、最も低い数値を示したのは、「授業の予習復習等に当てた時間」で2.15であった。これは、情報処理系の科目のように、授業時間内での課題作成を中心に行っていることや、既にスキルを身につけて予習の必要のなかった学生も少なからず含まれていることが一因として考えられ、必ずしも学生の準備不足や怠慢と結びつけることはできないであろう。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

共通シラバスを用いて授業の進捗状況を管理し、複数コマ開講されている科目について、以下の6グループに分類した。

- ・グループ1：情報処理入門（前期／全学科）
- ・グループ2：経済情報処理A+政策情報処理A+経営情報処理A+財務情報処理A（前期／各学科）
- ・グループ3：基礎演習（前期／経済学科）
- ・グループ4：基礎演習（前期／経済政策学科）
- ・グループ5：基礎演習（前期／会計ファイナンス学科）
- ・グループ6：情報処理入門2（後期／全学科）

3-2 情報処理系科目（グループ1・2・6）

グループ1(情報処理入門)では、ほとんどの設問項目において平均値は3.5以上であった。特に4.0を上回る項目が3個(「授業を通じての出席率」「授業への積極的参加」「教員の授業の準備」)であり、3.0を下回る項目は1個(「授業の予習復習にあてた時間」)であ

った。

グループ 2(経済情報処理 A、政策情報処理 A、経営情報処理 A、財務情報処理 A)では、ほとんどの設問項目において平均値は 3.5 前後であった。特に 4.0 を上回る項目が 2 個(「授業を通じての出席率」「授業への積極的参加」)であり、3.0 を下回る項目は 1 個(「授業の予習復習にあてた時間」)であった。グループ 2 は、同じ情報処理系の科目群でもグループ 1・6 に比べて全体的に平均値が低い印象を受ける。

後期のグループ 6(情報処理入門 2)では、ほとんどの設問項目において平均値は概ね 4.0 前後と高く、学習の効果が窺える。特に 4.0 を上回る項目が 13 個(「授業を通じての出席率」「授業への積極的参加」「聞きやすい話し方」「各回の授業のねらい」「各回の授業の内容」「教科書・授業レジュメプリント」「教員の授業の準備」「授業の専門的知識」「授業のわかりやすさ」「授業全体の目標」「授業を受けて満足」他)であり、3.0 を下回る項目は 1 個(「授業の予習復習にあてた時間」)であった。

3-3 基礎演習(グループ 3・4・5)

グループ 3・4・5 では、ほとんどの設問項目において平均値は 4.0 前後と高い。グループ 3・4・5 の科目群である基礎演習は、従来、授業内容・進度は担当教員の裁量に委ねられる部分が大きく、テキストも統一されていなかったが、一昨年より共通テキストとして『基礎演習ハンドブック』を作成し、授業の中で用いることにより、授業の到達目標を学生に明示したことが平均値の上昇の一因であると考えられる。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

板書や静肅性、話し方などについて改善を求める意見が多く、ほとんどの教員が学生からの指摘を真摯に受けとめ、次年度に向けて努力する姿勢を示している。また、授業の難易度や視聴覚教材に関する意見については、学生の記述に両極の評価が混在する場合もあり、対応の困難さが窺える。

5. 今後の改善に向けて

複数コマ開講されている同地科目については、授業の進度、内容、試験の難易度等に関して担当教員間の調整が不可欠だといえる。今後も定期的にミーティングを開催し、意見交換を続けるべきであろう。また、情報処理入門、情報処理入門 2、基礎演習が共通テキストを使用して成果をあげていることも参考になる。なお、授業の進め方が Power Point 等のソフトウェアや OHC(教材提示装置)を活用することが多くなるに伴い、「板書のしかたが適切だった」というような設問項目を設けることが科目によっては適切ではないことにも留意するべきであろう。

2009 年度の科目選定方針については、2010 年度カリキュラム改革の参考資料とするためにも、経済学(2010 年度からは履修者数が改善される)、基礎演習(2010 年度からは基礎ゼミナールに改編される)については引き続き実施することが望まれる。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2008年度は、2007年度の科目選定方針とねらいを踏襲した。すなわち、数学科・化学科・生命理学科では各教員につき1科目（主たる科目）を選んで授業評価アンケートを実施した。物理学科では全科目に対して実施した。ねらいは各学科の基本となる科目について授業評価アンケートを実施することで、理学部専門教育がどのように学生の視点から評価されているかを知り、分析・検討することで、各教員の授業の技量（教授力）の向上とともに、理学としての総合的な教育力の推進を目指すものである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 2007年度との比較

2007年度の結果と比較すると、2008年度は出席率（設問Ⅰ1）と静肅性（設問Ⅱ5）以外のすべての項目において平均値が低下しており、設問群ⅡからⅤのすべての項目において、この変化が有意であるとの結果であった。

2-2 学年間の比較

4年次生はそもそも講義科目の履修が少ないので、比較に適していないが、1年次生から3年次生の結果を比較することには意味があると考えられる。（回答数は、1年次生1,498、2年次生1,266、3年次生1,030、4年次生316。）各項目の平均点を比較すると、低年次生の方が出席率が高く、授業に積極的に参加したと答えているにもかかわらず、授業の準備や発展的な勉強につながっておらず、Ⅱ授業の進め方、Ⅲ授業から得るもの、Ⅳ総合的評価の各項目においても評価が低い。

2-3 学科間の比較

数学科と生命理学科での評価が高く、物理学科での評価が低い傾向がある。これは2007年度においても指摘されていたことであるが、物理学科は科目選定方針が他3学科と異なるため、解釈は難しい。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

多くの教員は学生からの評価結果はおおむね妥当である、予期されたものであると判断しているようであり、授業改善に結び付けたいと考えている。予習・復習の不足は慢性的な問題であると認識している教員が多くおり、それに加えて、学生の学習力の経年的低下を指摘する所見も複数あった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

板書、パワーポイント、CHORUS、配布物、教科書の使用など、授業の道具だてに関する所見が多い。学生からの評価を妥当とするものが多いが、しかし、肯定的な評価と否定的な評価の両方を受けて当惑している所見、また、学生の学習力低下が原因であると

分析している所見が複数あった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

授業内容、進度、授業の道具立てなどを中心に、なんらかの具体的な改善をしたいとの所見が多い。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 肯定的評価として多い意見の集約

所見を概観したところ、2007年度と同様に以下のような記述が多く見られた。(1) 丁寧でわかりやすい授業、(2) 読みやすい板書、(3) わかりやすいパワーポイント、(4) レジュメや補足説明プリントの配布、(5) 課題や小テストの効果的利用、(6) TA・SAの補助。

4-2 否定的評価として多い意見の集約

所見を概観したところ、2007年度と同様に以下のような記述が多く見られた。(1) 板書に問題がある（速い、字が汚い、字が小さい、構造化されていない）、(2) 声が小さい、滑舌が悪い、(3) 静粛性に問題がある、(4) 授業の進度が速すぎる、程度が高すぎる。また、教室設備に関する要望（暑すぎる、狭すぎる、椅子が硬すぎる）もあり、施設改善が必要である。

5. 今後の改善に向けて

2008年度は学生の評価の平均値が全般に有意に低下した。大幅なカリキュラム改編がなく、科目選定方針に変化がないうに、2007年度のアンケート結果を見て、授業の改善に役立てようと考えていた教員が多かったので、授業のやり方が悪くなったとは考えにくい。アンケートの回答率は2007年度の54.96%から60.67%に大きく伸びた。授業に出席してアンケートに答えたが、授業への評価は高くない学生が増加し、評価の平均値が低下したと考える方が妥当ではないだろうか。学生の学習力の低下を指摘する所見が複数あることなどを考えると、出席はしているが授業についていけない学生が増えている可能性がある。このことは低学年での低評価と合わせて経年的に考察する必要がある。また、記述による評価で、授業の程度や進度について肯定的・否定的の両方が現れた科目も複数あり、学生の多様化が進行している可能性も窺われる。

しかしながら、平均値低下の原因は他による可能性もあり、また、2008年度の変化が単なる浮動である可能性もないわけではない。2009年度の結果を踏まえ、2010年度から施行する新カリキュラムでの改善の方策を検討する必要がある。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

2008年度の授業評価アンケート対象科目の選定に際し、社会学部では2007年度をおおむね踏襲して以下のような方針を立てた。

- ①「講義科目1 教員1 科目」を原則とする。
- ②必修・選択必修の講義科目は原則としてすべて実施する。
- ③産業関係学科の科目は実施しない。

①は、現行の授業評価アンケートの主たる目的が、「各教員が行う授業の仕方や内容の改善」に置かれていることに対応している。②は、各教員および個々の授業に対する個別評価の観点をいくらか越えて、学部および学科のカリキュラムを点検する観点を加味したものである。必修および選択必修科目群は、学部教育カリキュラムの基盤をなす科目と位置づけられ、それらの多くが導入期に当たる初年次、2年次における履修が想定されている。したがって、これらの科目に対する学生の評価をみしておくことは、今後の基礎教育の改善に向けた意義が認められるものと考えられる。③は、2006年度からの学部再編において学生募集を停止した学科の開設科目については、授業評価を行わないことにしたものである。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 授業規模別

授業に対する満足度や評価は、大規模授業であるほど低下すると言われている。実際「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」の設問では、授業規模と評点との間に顕著な負の相関がみられる。そのほか、Ⅰでは、「4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、「5 シラバスは受講に役立った」、Ⅱでは、「2 各回の授業内容の量が適切だった」、「3 各回の授業のねらいは明確だった」、「4 各回の授業内容は明確だった」、「6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」、「7 板書の仕方が適切だった」、「9 教員は授業の準備を周到に行っていた」、Ⅲでは、「1 自分にとって新しい考え方・発想(が得られた)」、「2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識(が得られた)」、「4 現代に通じる普遍的な意味(が得られた)」、Ⅳでは、「1 わかりやすい授業だった」、「2 授業全体の目標が明確だった」、「3 学問的興味をかきたてられた」、「4 この授業を受けて満足した」の設問にも類似の傾向がみられ、小規模授業ほど満足度や評価が高いと言っていると思われる。

2-2 学年別

授業出席率(Ⅰ1)は学年が進むにつれて低下する。しかし、「Ⅱ この授業の進め方は…」、「Ⅲ この授業から得るものができたこと」、「Ⅳ 総合的にみて、この授業は…」という大項目に含まれる各設問については、おおむね1年生が最低、4年生が最高の評点を与え、2年生と3年生はその中間値を示している。「1年生は必修科目が多く、学年が進むにつれて学生自身が希望する科目を取るようになる」という解釈はいちおう成り立つが、必ずしも3年生が2年生よりも高い評点を与えていないことには一考の余地があるろう。

2-3 学科別

全23項目のうち、15項目においてメディア社会学科が首位を占め、続いて6項目において現代文化学科が、4項目において社会学科が首位を占めている（1位の評点が同点の項目が2つあった）。ことに「Ⅳ 総合的にみて、この授業は…」という大項目に含まれる4つの設問はすべてメディア社会学科がトップであった。このような結果が現れたことについては、学科としての方向性がある意味で限定されていて明確なメディア社会学科が、比較的指向性のはっきりした入学者を集めていることも一つの理由ではないだろうか。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

2007年度に開始された「グループ集計」において用いられたグループ分けを、2008年度も踏襲して実施した。3学科別に「必修科目・選択必修科目」および「選択科目」とグループ分けし、それぞれを前期・後期別に集計した。集計方法は変わっていないものの、選択科目の増加により、前年度の12グループから今年度は14グループに増えている。

3-2 各学科、必修・選択必修科目、選択科目による授業評価の傾向

以下では、アンケート設問の「Ⅳ 総合的にみて…」に限定して、各学科の「必修科目・選択必修科目」と「選択科目」の評価を概観する。結論を先に言えば、3学科の科目群に対する評価傾向にはほとんど相違がないと言ってよいだろう。Ⅳの総合評価には4つの設問が含まれており、それらの算術平均を計算すると、各学科の科目カテゴリー2種の評価平均点は、それぞれ社会学科が3.4と3.8、現代文化学科が3.5と3.8、メディア社会学科が3.5と3.9となっている。数値そのものは、おおむね良好と言ってよいのではないか。

4. 今後の改善に向けて

小規模授業ほど満足度や評価が高いことは順当な調査結果と言えようが、あまりに大人数の授業は何らかの対策が要求されることを示唆していよう。2年目となったグループ集計の結果は妥当な線に落ち着いている。社会学科、現代文化学科の評価が必ずしも低いわけではないものの、メディア社会学科の科目群は全体として高い評価が与えられていることに注目したい。他の2学科も、学んで取り入れるべきところはそうすべきであろう。

4-5 法学部

1. 科目選択方針とそのねらい

従来どおり専門講義科目を対象とした。大人数科目が多い法学部としては、これらの科目における教育が容易ではないことも考慮しつつ重視している。一方で、演習科目は少人数でアンケート調査が行いにくいという事情もある。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

2005 年度以来、3 年間連続して平均値が上昇してきたが、今年度もこの傾向を継続している。各教員の努力の成果であるとともに、学生による授業アンケートおよび教員による改善策立案、提示の成果であると考えられる。0.05 ポイント以上上昇した項目は、I2「この授業に積極的に参加した」、II2「各回の授業内容の量が適切だった」、II5「十分な静粛性が保たれた」、II6「教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった」、II8「映像視覚資料教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった」、III3「自分で調べ、考える姿勢」、IV2「授業全体の目標が明確だった」、IV4「この授業を受けて満足した」であり、授業において様々な工夫がなされ、学生の満足につながっていることがうかがわれる。その一方で、唯一平均値が下降したのは「聞きやすい話し方だった」の項で、0.09 ポイントとかなり大きな下降であった。

従来と同様に、他学部と較べて回答率が極端に低いことが目立っている。その背景としては、法学部のカリキュラムに必修科目が無いことや、大教室での授業が多いため出席を取らない（出席率を成績評価にカウントすると、熱意の乏しい学生たちによる私語が多くなるために敢えて出席を取らないというジレンマもある）、ミニテストもあまり行わないなどの事情がある。とはいえ、学部としてはこのような状態が内包している問題をあらためて議論する必要があると思われる。これに関連して、上記のようにII5「十分な静粛性が保たれた」が連続して上昇していることは評価されるべきではあるものの、このように出席率が低いことを考えると割り引いて考える必要があるだろう。

設問項目別の平均値を見ると、平均値3以下の項目は、I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I6「授業の予習復習に毎週当てた時間」であった（III3 授業から得ることができたこと、において「自分で調べ、考える姿勢」のポイントが低いのもそこに原因があるだろう）。いずれも学生の授業への取り組みに関するものであり、受動的な学習態度の結果だといえる。大人数授業であることもその理由の一つであろうが、教員としてはそれを前提にさらに工夫が必要であろう。

一方で、これらの項目の平均値がわずかずつながら毎年上昇していることと、I2「この授業に積極的に参加した」が0.8 ポイント上昇していることが注目される。このことは大人数授業が多いながら工夫を試みた教員の努力と学生の学習意欲が評価されるべきであろう。

授業規模別平均値を見ると、150 名以上になると各項目の平均値が下がることが分かる。とくに、II5「十分な十分な静粛性が保たれた」の項目が0.5 ポイント以上下落していることが目立っている。100 名程度までが効果的な授業であることを示しているだろう。学年別

平均値を見ると、学年が上がるごとに平均値が上昇するという傾向がみられることはこれまでと同様である。大学の授業に慣れてきたこともあろうが、知識が蓄積されて行くにつれて理解度が深まっている結果だと考えることもできよう。ただ、I1「授業全体を通じての出席率」で4年次生が0.2ポイント以上と大きく落ちていることが気にかかる。就職活動による影響だと思われるが、せっかく理解力が深まってきた4年次生の時点であるだけに惜しまれる。

3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

概ね肯定的であるが、一部に厳しい批判も散見された。学生の評価が集中しているのは、授業進捗のテンポ、授業内容の分かりやすさ、声の聞き取りやすさ、私語に対する注意が行き届いているか、板書の適切さ、レジュメなどが適切に配布されているか、などである。また、授業や教育に対する教員の熱意や学生に対する思いやりなどについても敏感に反応している。

講義の声が通っているかどうか、板書が読み取りやすいか、などの基本的な点が、ひいては授業に対する満足度に響いていると思われ、グラフなどに現われた評価の相関性は高い。パワーポイントの使用についても、書き取りが困難であるとの指摘がある。

過去に見られたような1年次生の乱暴な内容や言葉は目立って少なくなったことが2008年度の特徴である。この件に対する苦情が相次ぎ、「学生による授業評価アンケート」実施委員会が学生に対して自覚と責任を持って回答すべきであるという注意書きが加わったことが成果をあげたのではないと思われる。

指定された教科書が、実は不要であったという指摘があったことは注意する必要がある。また、教室の冷房が効きすぎて困るという苦情が少なからずあった。この件については教員にだけ責任を帰することはできないであろうと思われ、担当部局に改善を求めたい。

4. 担当教員からの所見表に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほとんどの教員が評価結果を真摯に受け止め、今後の授業の参考にしたいとしている。授業評価制度に対する積極的な評価が定着していると思われる。静粛性を保つために横長の教室の構造が有効だったという指摘があったことが注目される。

例年のことながら、学生の受動的な態度や予習、復習、発展的な学習を行っていないこと、同時にそれに対する具体的な対策が立てにくいことが、多くの教員にとって共通の悩みである。参考文献についてのレポートを書かせることや、小テストの実施、事例の提示、授業における学生との質疑に効果があることなどが紹介されている。「発展的な学習」のために、「授業の後にも問いかけが残るよう、オープンエンドな展開を心がけている」という記述があったが、参考になるのではないだろうか。

複数の教員が出席率の悪さと、それが内包する問題性を指摘している。ある教員からは、履修登録をしたものの欠席している学生に対するアンケート調査こそ必要ではないかとの指摘があった。授業の内容や方法のゆえに脱落したのかもしれない学生の声を聞くことは必要であろう。インターネットを利用した実施は可能ではないだろうか。

実施委員会で検討されたい。

映像視覚教材の使用に対する学生の評価は肯定的、否定的に分かれている。そのことについて教員の中に戸惑いが生じているように思われる。パワーポイントの使用については、データ配布の工夫が広がっていることがうかがえた。

4-2 「記述による評価欄に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の批判的評価や要望に対して積極的に改善を約束する回答が多かった。なかでも「早口」を改善するとの回答が多かったが、実際には身についたもので改善は容易ではないこともうかがわれる。パワーポイント使用に関する改善の回答も少なくなかったが、これも模索の状態という感じが伝わってくる。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほとんどの教員が、学生の評価に対応した具体的な改善策を示し、「より魅力的でかつ発展的な学習への橋渡しともなりうる授業」「参加型やインターアクション型の授業」をめざして改善を進めていくことを約束している。このアンケート調査の効果が継続的に生れていることが実感できる内容である。

5. 今後の授業改善に向けた課題の提示

昨年に引き続き、出席率が低いことの原因の解明と改善のための対策が必要である。また、このことが教育上もたらす影響も考える必要がある。FD委員会や教授会において問題提起したい。

テクニカルな問題の多くは、実は大人数教育に起因するものが少なくない。大人数教育は私学の宿命ともいえるが、教員はこの問題を改善するために多くの努力を払っていると見える。今後も知恵をしばる一方で、大教室のインフラの積極的な改善を当局に求めたい。また、少人数教育である基礎文献講読や2年次以上の演習での教育との連携をさらに考案すべきではないか。

4-6 経営学部

1. 集計データからみられる結果のまとめ

経営学部は2006年度に開設されたため、今回3回目の授業評価アンケートの実施である。本年度は3年次までの展開科目に対する評価なので、昨年までとは異なり講義科目ではほぼ予定されていたすべての科目が評価対象となった。全回答者(8,397人)の内訳は1年生が2,282人、2年生2,856人、3年生2,195人、4年生(他学部)730人となっている。

1-1 各項目の平均値

昨年度と比して全般的に大きな変化は見受けられないが、全項目の平均値が上昇した。I学生自身の授業への取り組みについての自己評価については、各項目とも昨年から平均値をあげている。「出席率」(I1)は昨年よりは平均値が0.02ポイント上昇し、「積極的に参加している」(I2)が0.03、「授業の準備」(I3)が0.13、「発展的勉強」(I4)が0.09、「シラバスの活用」(I5)が0.1とそれぞれ上昇した。「講義時間以外の主体的な勉強」(I6)は0.09上昇したが2.23であり、講義時間外での学習は必ずしも積極的とはいえない。しかしながら、全般的にはある程度の意欲の向上が理解できる。

II教員の授業の進め方、III授業内容、IV総合評価の各項目についても、すべて平均点は3.40以上で、昨年同様全般に評価は低くない。とりわけ「教員は授業の準備を周到に行っていた」が4.11であり、他も3.8以上が8項目と全体的に良い評価を得ている。

1-2 クロス分析結果

VIの総合評価とクラス規模の関係では、概して全学同様のクラス規模が小さいほど評価が高い傾向が見受けられる。151名以上の10クラスでの平均が、51~100、101~150名クラスのいくつかの項目よりも高くなっているが、担当者の熱意や創意工夫などによるところが大きいと推測できる。ただし、数自体が多くないので有意な数値の比較とはいえない。

また、学年別の比較では、概して学年が下がるほど評価が高くなるという傾向がみられた。今年度は複数の項目で3年生の平均値が最も低くなるという傾向が見受けられる。昨年度は2年生に同様の傾向があるので、同一学年特有の評価態度と考えることもできる。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

2-1 授業評価に対する担当教員の所見

前回同様、教員は前回の評価を参考にして改善を進めている様子が多くの所見から読み取ることができた。昨年同様、静粛性の確保については多くの教員が悩んでいる。また、学生の安易な注文に迎合的に流されることに対する懸念の表明も一部で見られた。

2-2 記述による評価に対する担当教員の所見

昨年同様、学生からの意見を真摯に受け止めて、改善しようとしている所見が多くみられた。視聴覚教材や板書や説明のしかた、授業のスピード(早すぎる)などについて

のコメントが多かった。また、教員が課す課題の意味が理解できずに批判的なコメントを書かれていたことに対する疑問が示されるなど、学生の授業に向かう基本的態度に対する疑問も課題としてあげられている。

2-3 改善に向けた今後の方針

昨年同様アンケート結果を受けて、板書・パワーポイントの見やすさ、資料配布のしかた、静肅性への対処、学生の理解度の把握、出席のとり方、授業のスピードの調整など、具体的な改善案が出されている。

3. 学生からの意見の集約

3-1 肯定的評価として多い意見の集約

昨年同様、授業、分かりやすさ、教員の話し方や対応、パワーポイント、説明内容、おもしろさ、静か、などが頻出の言葉となっている。また、授業で出される課題に対しても予習として役に立つ、理解が深められるなどの意見がよせられていた。ビデオ教材に対する評価が非常に高かった。

3-2 否定的評価として多い意見の集約

昨年同様、授業、スピード、板書、人、パワーポイントの量およびスピード、人数が多い、うるさい、内容、教室などが頻出単語となっていた。授業自体の進度、板書やプレゼンのしかたおよびスピード、レポートなどの量、人数が多い、授業環境（教室が狭い、うるさい）など教育環境のハード面・ソフト面両方に対しての意見が多く寄せられていた。私語に関しては、学生に非があることを学生自身も理解したうえで、教員に静肅性を保つ努力を期待する記述、教室の改善要望が多かった。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

4-1 授業環境

経営学部は以前から授業中の静肅性確保が課題であるが、今年度も多くの教員が悩んでいることが明らかになった。また、学生側も学生に責任があることを認めたうえで、教員による授業管理を強く求めていることが確認できた。静肅な授業環境を担保する適切な教室の確保、TA、SAの十分な配置が今後も不可欠である。

4-2 今後の対応

昨年同様、5スケールの定型的な質問項目からは平均的な傾向、非定型の記述による評価からは良い点・悪い点の両極端の意見が収集できた。記述による評価の肯定的意見では、わかりやすい説明や話し方、見やすいパワーポイント資料、静かな環境の維持があり、否定的意見では授業の量が多い、スピードが早い、板書やプレゼンのしかたが悪い、授業環境（人数・教室）が悪いなどが多かった。これらの意見は、教員が授業改善をしていくためのヒントになる。

理想的なのは、学生が自ら積極的に授業に取り組み、教員もモチベーションの高い学

生を相手に教育の質を高め、その結果高い総合評価を得るというパターンであろう。経営学部では、全学でも先駆けてGPAを導入した学部の一つであり、公平な授業評価と講義受講の意義を学生にも明示的に告知している。こうした姿勢をさらに深めていくために、授業運営の総合的改善に向けて早めに対策を立てつつ、完成年度に向け理想的な教育環境の構築に近づけていきたい。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

開設年度であり開講科目が少なかったため、言語科目（コミュニケーションセミナー／CS 科目）以外のすべての開講科目において実施した。本年度、アンケートを実施した科目は次のとおりである。

ことばと人間、コミュニケーション入門、基礎演習 1、基礎演習 2、言語学入門、地域研究入門、文化研究入門、日本語コミュニケーション演習 A、英文法概論、英語学概論、日本語学概論、日本語学特論、文化人類学、文化と芸術 A、文化と芸術 B

上記科目のうち、必修科目については、グループ集計を行った。

1. 集計データにみられる結果のまとめ

1 年生だけだということもあってか、回答率は非常に高かった。これは、1 年生だけというだけでなく、少人数科目が多かったことにも起因するのではないと思われる。

設問項目別平均値から、出席率についての項目が 4.82 と非常に高いにもかかわらず、学生自身の授業に対する積極的な態度項目（予習復習の時間、十分な準備の実施、自らの発展的な学習）では、非常に平均値が低い。この結果をそのまま読めば、「授業には出席したが、あとは積極的には何もしなかった」ということになる。大学での学びは、学生自らの積極的な姿勢が必要となってくるので、今後は、いかにして学生の積極性を引き出すかが課題であろう。

また、シラバスが受講に役立ったかどうかについての項目でも、平均値が 3.0 を下回っている。さらに、学生にとって有用なシラバスの見せ方について、検討していく必要があると思われる。

授業の進め方に関する項目については、概ね悪くない結果が出ているが、「板書の仕方の適切性」についての項目だけが 3.0 を下回っている。学生に分かりやすく、授業を実施することは、教師の責任でもあるため、今後、板書のしかたも含めた FD 活動を実施していきたいと考える。

2. グループ集計にみられる結果

2-1 グループ集計の分類

必修科目について、次の 8 グループに分類して集計を行った。

グループ 1：基礎演習 1（共通シラバス、複数コマ展開）

グループ 2：ことばと人間、コミュニケーション入門（前期）

グループ 3：言語学入門、地域研究入門、文化研究入門

グループ 4：グループ 2 と 3 の科目（共通シラバス以外の前期必修科目）

グループ 5：グループ 1 から 3（前期の必修科目すべて）

グループ 6：ことばと人間、コミュニケーション入門（後期）

グループ 7：基礎演習 2（共通シラバス、複数コマ展開）

グループ 8：グループ 6 と 7 の科目（後期の必修科目すべて）

2-2 基礎演習1について

基礎演習1では、ワークショップを軸にした授業展開を実施した。その上、図書館ツアーやレポートの書き方など、多くの要素を盛り込んでしまったために、学生にとっても教員にとっても消化不良だったことは否めない。それが、「授業の目標が明確だったかどうか」などの項目の平均値に現れているのだと理解する。

また、この科目は、共通シラバス利用の複数展開科目であるため、担当教員によって多少のばらつきがあったが、この程度であれば許容範囲かと思う。

2-3 基礎演習2について

基礎演習2では、本を一冊とりあげ、それを軸にして授業を展開した。そのため、それを単調に感じたりした学生がいたことも事実であるが、基礎演習1よりは、授業の目的については理解してもらえたようである。この科目も、共通シラバス、複数展開科目であるため、やはり担当教員による評価のばらつきがみられた。

今後については、科目内容と教員のマッチングや、教員間でのばらつきの出ないような方法について、考えていきたい。

2-4 その他の必修科目について

全体の総評のところにも書いたが、やはり「出席率は高いが積極的に関与はしない」タイプの学生が多いようである。また、1年生対象の必修科目であるため、学生にわかりやすい授業を展開していけるように、教員のFDなども積極的に進めていく必要性を感じた。

3. 今後の改善に向けて

学生の興味をひきつけ、積極的に関与させていけるような授業を展開していくためには、教員間でのFD活動などが重要だと考える。そして、このようなアンケートは、教員が自分の授業を振り返る、いいきっかけになっていると思う。個々の教員の所見からも、教員が学生からの意見を真摯に受けとめ、今後の授業展開に役立てようとしている姿勢が見られたことから、このアンケートが授業改善の役に立っていることがわかる。

学部としては、今後、展開する科目の授業をより一層改善していくために、1) 学生にとってわかりやすい、授業の内容を的確に提示するシラバス作成の方法を検討する、2) 板書の方法、視聴覚機器の使用などを含めた授業方法の改善方法を提案する、3) 共通シラバス、複数コマ展開型の科目においては、担当教員による差が出にくい授業方法や内容などについて検討する、などのことを、学部のFD活動などを通して積極的に行っていきたいと思っている。

今年度、言語科目以外のすべての科目でアンケートを実施したが、学生から「同じアンケートを複数の科目で何回も書かせられる」という苦情を耳にした。教員の所見の中に「あまり真剣に考えずになんとなく回答している」のではないかとも読める記述があったのも、回答するのが面倒くさいと感じた学生がいたからかもしれない。確かに、学生の気持ちも理解できるので、学生から真実の評価を引き出すためにも、来年以降は、科目の選定をさらに慎重に実施したいと考える。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で、授業評価アンケートの実施科目を選定した。選定した科目数は73である。

- (1) 学部の設置意図にそって分析が行なえるように科目を選定。
- (2) 概ねこれまでの授業評価実施科目数を目度に、共通科目（必修科目）、共通基幹科目（選択必修科目）、学科基幹科目（必修科目）の全科目と学科基幹科目（選択必修科目）のうち、1・2がある科目については2だけを対象とした。
- (3) 関連基礎科目や一般の語学系科目、専門演習については対象外とした。
- (4) アジア人財観光教育イニシアティブ科目を加えた。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

全体としてみると概ね良好で高い満足度が得られているが、I3「履修にあたって十分な準備」I6「予習復習等に毎週当てた時間」などの設問項目に対する回答で教室外での十分な勉強時間があてられていないことが見て取れる。授業の進め方については、II5「十分な静粛性」で学部平均3.56と低くはないものの、他の授業の進め方についての評価に比べると若干低く静粛性を現状以上に保って欲しいと願っていることが分かる。II6「レジュメプリントや参考文献が効果的」が学部平均3.78に対して、II7「板書の仕方が適切」が3.28と低く、懇切丁寧な教材資料が配られることが当たり前前に感じられてきていることが見て取れる。受講に対して積極的に自ら調べ、議論し、質問するのではなく、与えられた教材だけを学ぶ学生が少なからず存在することが推測される。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

例年同様に、多くの教員は学生からの授業評価は概ね良好であったと判断している。授業評価の結果を受け止め、今後の授業に役立てたいという意見が多かった。パワーポイントやスライドを用いた授業が一般化してきており、教材資料の提示方法や提供方法について検討して頂いていることが所見から明らかになった。静粛性の保持や授業に対する満足度は受講者数によるところが大きいとの意見が多く、大型教室での授業を減らして行きたいという大学側の方針と合致していることが確認できた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

視覚教材のつかい方やゲストスピーカーのつかい方、資料の配り方やつかい方についての意見が担当教員の意図と異なる場合がいくつか見られ、受講者に対する説明を一層繰り返して徹底させる必要性が認識されている。講義内容について理論と実践のバランスに工夫が必要であろうとの意識が教員側に見られる。授業評価での記述内容と日常的なリアクションペーパーでの記述内容に差異が見られることに疑念を感じておられる教員がおられる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

繰り返し授業評価に協力して下さっている先生方は既に改善の試みを数度にわたって実施して下さい、学生側の受講姿勢の改善も不可欠であろうとのコメントも見られる。講義内容の難易度についての指摘については現状よりレベルを下げられないという意見もあり、受講生と教員の連携が不可欠であろうことが見て取れる。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

例年同様に実践的な内容の話題提供や学外からのゲストスピーカーの登用、十分に準備された教材資料、パワーポイントなどについての評価が高かった。教員が静粛性を保つ努力をしたことに対する肯定的な評価も存在し、理想的な学習環境を正しく評価する学生がいることが確認できた。また、自らの勉学・研究意識に刺激になったという意見もあり、大学で学ぶ意義をきちんと見出し実行できている学生いることが分かった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

概ね否定的評価として多かったものは、板書の書き方や講義の話し方、教材資料の配布要望、静粛性の欠如などについてである。板書はプロジェクターの使用や教材プリントの配布により全体的に減ってきていると考えられるが、キーワードだけを板書することに対して脈絡がつかめないという不満が生じているのであろう。目に映ったものだけをノートするのではなく、自分の頭の中で講義されている内容を理解し、自らの言葉でノートするという訓練が不可欠であろうと考えられる。静粛性は今以上に保つ工夫を行なって行く必要がある。別の授業と内容的に重なる部分が存在することを指摘する意見があったが、履修者によってはその別の授業を聴いていない場合もあるため、全科目について講義内容の重複を精査する必要があるが現状では出来ていない。多少の重複は仕方がないことを説明しておくことが必要であろう。

5. 今後の改善に向けて

授業の目的や内容が異なるにも関わらず学生側の評価が一義的になされていると見られる記述があり、全ての要望に対して一様に応えるのは適当でない。科目によってはその設置目的の提示方法を改め、受講に対しての心構えを周知させる必要がある。履修上限が定められている理由に予習と復習に要する時間が加味されていることについては履修ガイダンス等で繰り返し説明してきているが、予習と復習を必ず行なわれているかどうかは分からない。予習復習を行なうことに加え積極的に授業に質問をしたり、議論に参加するなど理解の度合いを高める工夫を学生側にも期待したい。

大規模教室での授業は徐々に低減させていく予定であるが、静粛性を保つには学生側の協力が不可欠である。私語や授業中に出入りが他の学生の学ぶ権利を侵害しているということを全ての学生が認識してもらう必要がある。教員側の指導の仕方によっても授業中の静粛性が異なるようであり、教員の授業の進め方にも改善できる場所が残っていると考えられ、具体的に静粛性を保つ教授法を紹介する機会を作ることが必要だと考えられる。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

本学部では、次の区分・科目を参考に対象科目を選定することとした。

1) 1 教員 1 講義科目を原則とする

選択に際し、複数教員担当科目は除き、福祉学科・コミュニティ政策学科は 3 年次配当科目を優先する

2) 下記の科目を追加する

①2008 年度に開講初年度の講義科目

②スポーツウエルネス学科 2008 年度開講科目。ただし複数教員担当科目を除く

3) 演習・実習系の科目は対象としないが、1 年次の基礎演習では実施する

この結果、アンケート対象科目は延べ 130 科目、科目類型は 15 グループとなった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今年度の考察に当たっては、経年比較が原則できないようになっているため、以下では特徴的と思われる事項に絞って取り上げる。

まず、本学部の回答者を学年別にみると、1 年生が 2,517 人ともっとも多く、次いで 3 年生の 2,042 人が続いている。他学部の多くで学年進行に沿って回答者が減っているのと対照的である。

次に、設問項目を学年ごとにみると、学年進行によって「授業全体を通じての出席率」(1 年 : 4.67→4 年 : 4.11) や「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(1 年 : 3.07→4 年 : 2.96) の数値は低くなっている。他方で、「十分な静肅性が保たれた」(1 年 : 3.76→4 年 : 4.28) や「教員は授業の準備を周到に行っていた」(1 年 : 4.09→4 年 : 4.32) の評価は学年進行に伴い高くなる傾向がある。同様に、「自分にとって新しい考え方・発想」(1 年 : 3.78→4 年 : 3.99)、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」(1 年 : 3.69→4 年 : 3.98)、「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」(1 年 : 3.61→4 年 : 4.16)、「学問的興味をかきたてられた」(1 年 : 3.58→4 年 : 3.93) についても、学年進行に伴い評価が高くなる傾向がみられる。

データからだけで即断はできないが、このことについて考えられる要因としては、ひとつには、1 年生の配当科目は入門的な内容の科目が多く、選択の余地も乏しいために、自身の関心に応じてくれる科目の選択が限られているということが推察される。そして、もうひとつには、1 年生は大学での勉強に慣れておらず、出席はするが受身の姿勢になっているためでもあると考えられる。たとえば、「教員は授業の準備を周到に行っていた」の評価が学年進行に応じて高くなるのは、教員が 1 年次配当の授業準備を手抜きしたというよりは、学生が高校までの学習スタイルと大学でのそれとの違いを理解したり、教員とのコミュニケーションの機会が増えたりといった、学生側の事情に起因すると考える方が自然であろう。

次いで、各設問項目を授業規模ごとにみると、「聞きやすい話し方だった」(50 名以下 : 4.01→151 名以上 : 3.75)、「各回の授業内容は明確だった」(50 名以下 : 4.01→151 名以上 : 3.70)、「十分な静肅性が保たれた」(50 名以下 : 4.22→151 名以上 : 3.48)、「教科書・授業

レジュメプリントや参考文献が効果的だった」(50名以下：3.90→151名以下：3.80)、「板書のしかたが適切だった」(50名以下：3.39→151名以上：3.16)について、クラスサイズが大きくなるほど評価が低くなる傾向がみられる。所見票によれば、大規模クラスでは授業の進め方について苦慮し、さまざまな工夫をしている記述が目立つ。こうした授業改善の対応は今後も引き続き取り組む必要があるが、それ以上に、これらの評価を改善するにはクラスサイズの見直しが有効であるともいえよう。そして、クラスサイズの多寡は、「教員は授業の準備を周到に行っていた」(1年：4.24→4年：3.86)、「わかりやすい授業だった」(1年：3.97→4年：3.53)、「この授業を受けて満足した」(1年：3.98→4年：3.44)の評価にも関係している。これらの設問項目については、単純に評価点のみで科目間の比較を行うことは妥当ではないといえるだろう。

3. グループ集計にみられる結果

グループ集計は、科目選定方針の考え方に沿って、次のような15類型に分類して実施した。これらのうち、グループ1は3学科に共通する1年次の必修の演習科目である基礎演習であり、以降は原則として学科ごとの専門教育科目群に基づく分類となっている。

なお、2009年度から社会福祉士・精神保健福祉士資格試験の受験に必要な科目が変更されたことに伴い、グループを見直す可能性がある。

- 1) グループ1：基礎演習
- 2) グループ2：福祉機器論・援助技術総論・医学概論
- 3) グループ3：障害者福祉論1・精神医学1・福祉環境論・精神保健福祉援助技術各論1
- 4) グループ4：福祉産業論・ケアマネジメント論・福祉士法論ほか4科目
- 5) グループ5：コミュニティ政策入門・少子高齢社会論・地球コミュニティ論
- 6) グループ6：健康政策・国際経済論・地方財政論ほか3科目
- 7) グループ7：政策過程論・教育政策ほか5科目
- 8) グループ8：運動方法学演習1・生理学ほか5科目
- 9) グループ9：発達障害論・医学概論ほか2科目
- 10) グループ10：社会福祉法制・公的扶助論ほか9科目
- 11) グループ11：福祉情報論・リハビリテーション論ほか11科目
- 12) グループ12：家族政策・コミュニティと宗教ほか3科目
- 13) グループ13：政策科学・福祉政策ほか10科目
- 14) グループ14：環境政策・パートナーシップ論ほか13科目
- 15) グループ15：運動方法学演習2・ウェルネス科学総論ほか12科目

4. 今後の改善に向けて

今回の授業評価については、全体としてみれば、概ね満足のいく評価を受けているようである。これは、ひとえに各教員による地道な改善努力の成果であろう。たとえば、視聴覚教材等を活用したり、グループ・ディスカッション等の参加型・対話型の授業を採り入れたりといった取組を行っていることが、所見欄の個票から読み取れる。また、比較的評

価が低い授業の所見欄でも改善策について記述してあるものが多く、自己点検の道具として、本授業評価は一定程度機能していると評価できよう。

今後の課題として指摘すべき点は、本授業評価の活用・運用のあり方についてである。授業評価は、あくまで個々の教員の自己点検のためだけに用いられるべきものであることを改めて確認しておきたい。というのは、全体の傾向をみる限り、評価の数値だけをもってすべての科目を横並びで比較することは、次の点で問題があると考えからである。

第 1 に、クラスサイズが大きくなるほど、授業の進め方に関する評価（授業内容の量・ねらい・明確さ）やわかりやすさ（IV 1）・満足度（IV 4）に関する評価が低くなる傾向が認められることである。極端にクラスサイズが異なる場合、そもそも同じ基準で評価すること自体、アンフェアである。仮に傾向をつかむために科目間を比較する場合があったとしても、同一の設問で一律にデータ処理することが果たして妥当なのか、検討する必要がある。

第 2 に、授業評価による授業改善の方向が、往々にして学生にとっての理解しやすさ・わかりやすさに向けられがちだということである。本授業評価の評価点を上げようとする、板書よりはプリント、活字よりはスライド・DVD というように、学生にとって内容が理解しやすい、わかりやすいということがポイントとなる。とりわけ、双方向のコミュニケーションが取りにくい大規模授業の場合、こうした対応は重要であることが、今回の調査結果から明らかになったといえる。

しかしながら、一般に、パワーポイントのようなスライド等を用いて説明する場合、文字は簡潔に大きくする必要があるから、レジュメを切るよりも情報量は絞らざるを得なくなる。これに、DVD 教材を併用すれば時間的な制約が生じ、ますます簡潔化することが求められるだろう。今回の結果からも、わかりやすさ（IV 1）と満足度（IV 4）には強い相関が認められる。この結果、授業評価の評点を上げる努力が、授業の質の低下につながってしまうという事態が考えられるのである。

実際、理論・データを扱う授業や抽象度の高い授業の評価が比較的低くなっているようである。これは、本学部が、必ずしも学問上の特定のディシプリンに依拠しないカリキュラム体系になっているという制度上の要因も無視できず、そのための改善策も求められるが、だからこそ、教員個人の問題に帰することなく、学生にも学ぶ努力を促したり、必要な制度改善を図ったりといった対応が求められるように思われる。こうした点からも、評価の安易な横並びの比較は慎むべきである。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

現代心理学部の科目選定方針は、2007年度の方針を踏襲して：

- (1) 「総合展開科目」全科目
- (2) 初年次教育科目
- (3) 専任教員は、講義科目1教員1科目。このほか、映像身体学科2年次「基礎演習」とした。

(1)の「総合展開科目」とは、学部の共通科目であり、心理と映像・身体、すなわち心とからだをつなぐ学際的領域の講義科目が配当されている。この科目群の授業評価は、今後の現代心理学部のカリキュラム展開だけでなく、「現代心理学」というディシプリンの存立可能性を探る上でも重要と考える。

(2)の初年次教育科目には「現代心理学入門」（総合展開科目でもある）、心理学概説1、心理学概説2という、複数教員によってオムニバス方式で展開される授業が含まれている。評価する学生にとっては、授業全体を総合的に評価してくださいと言われても、担当教員ごとに違いがあって記入が難しい面もあるが、授業評価の結果を担当教員間で共有することがFDに資するものと判断した。

(3)は専任教員の講義の技術を向上させるのがFD活動の重要な目的であると考えてこう決めた。映像身体学科の「基礎演習」は同じ教科書で複数教員がクラス別に担当するので、その教育効果を検証するために選んだ。

上記方針に従って選ばれ、アンケートが実施された科目数は51科目、その科目の履修者数は6,485人、回答者数は4,074人であった。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

2-1 回答率の低下

現代心理学部が発足した2006年度から3年間の授業評価アンケート回答者数と回答率（回答数を履修者数で割ったもの）を表1に掲げる。

回答率の低下は、2006年度には1年生が履修者の大半を占めていたのに、学部の完成年度が近づくとつれて上級生の比率が増えて、出席率が低下したためと思われる。それでも、現代心理学部の回答率は全学平均に比べてまだ高いように見える。全体の平均には、履修者数が多くて回答率が著しく低い全学共通カリキュラムと法学部の科目が入っているためである。ただし、12学部・組織の中の順位で見ると、現代心理学部は6位であって、決して自慢できる値ではない。

アンケートの当日に教室にいながら回答をしない学生が数多くいるとは思えないので、この回答率は授業への出席率を反映するものとみなすべきであろう。事実、設問I-1「授業全体を通じての出席率」に対する5段階評定の平均値は、2007年度が4.61、2008年度は4.62とほとんど変わらない。

表1 授業評価アンケートの回答者数と回答率（%）の推移

学部等	2006年度		2007年度		2008年度	
	回答者数	回答率	回答者数	回答率	回答者数	回答率
現代心理	1,096	71.77	2,845	68.64	4,074	62.82
全体	67,467	46.86	76,920	53.53	78,783	55.88

2-2 学科間の比較

設問IV「総合的にみて、この授業は・・・」の中にある4問に対する回答を、2007年度と2008年度について学科間で比較したい（表2参照）。

従来から映像身体学科科目の評価が心理学科に比べて低いことが、現代心理学部においては改善課題と認識されてきた。その理由の一つとして、映像身体学科の教員の多くが大学での授業経験を持っていない点が挙げられていた。2007年度に比較すると、映像身体学科科目の評価は高まっていて、FD活動の成果が現れていると考えられるが、心理学科科目の方がより大きく改善されていて、学科間の差はむしろ開いている。

科目選定方針が学部等によって異なるため、この両学科の授業評価が全学の中でどの程度の高さなのかを判定することは難しいが、試みに2007年度の新座3学部との比較をすると表3の通りとなり、「学問的興味をかきたてられた」以外の評価が観光学部、コミュニティ福祉学部の平均に及ばないこと、「分かりやすい授業だった」と「この授業を受けて満足した」の評価平均値は心理学科でさえこの両学部には及ばないことが明らかになった。

表2 設問IV「総合的にみて、この授業は・・・」に対する回答の平均値
(2007～2008年度, 学科間比較)

設問	2007年度		2008年度	
	心理	映像身体	心理	映像身体
IV-1 わかりやすい授業だった	3.51	3.33	3.86	3.40
IV-2 授業全体の目標が明確だった	3.75	3.37	3.95	3.47
IV-3 学問的興味をかきたてられた	3.70	3.57	3.81	3.67
IV-4 この授業を受けて満足した	3.60	3.54	3.86	3.63

表3 設問IV「総合的にみて、この授業は・・・」に対する回答の平均値
(2007年度, 学部間比較)

	現代心理	観光	コミ福
IV-1 わかりやすい授業だった	3.47	3.62	3.70
IV-2 授業全体の目標が明確だった	3.56	3.69	3.74
IV-3 学問的興味をかきたてられた	3.66	3.53	3.55
IV-4 この授業を受けて満足した	3.60	3.64	3.67

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

所見票を提出した教員は皆、学生による評価を真摯に受け止め、授業改善への取り組みを約束してくれた。しかし評価対象 51 科目中 19 科目において（2009 年 4 月 22 日現在）教員の所見が出されていないのは、大変残念なことである。

4. 学生からの意見の集約

自分の担当科目に対する意見だけでなく、多数の科目への意見を概覧することで初めて分かったことがある。

その一つは、授業内容が重複していることに対する批判である。別の科目での多少の重複は、どちらか片方の授業しか履修していない学生もいるので構わないと思うが、必修科目同士の重複や、オムニバス形式で進める一つの科目内の担当者間の重複は、できるだけ避けるよう、科目定義を明確化する、担当者間の打ち合わせを綿密に行うなどの対策が必要と考える。

二点目は、総合展開科目（両学科の共通科目）に対して、心理学系の科目に対しては映像身体学科学生から「心理学の話に偏りすぎている」、「映像身体学科学生に配慮が足りない」と批判され、映像身体学系の科目に対しては心理学系学生から「専門的すぎて分からなかった」と批判されている科目があることである。この科目群の位置づけを学部として再確認し、担当教員にも、受講学生にも周知させることが必要と思われる。

三点目は、教員の声、話し方に対する学生の要求が厳しいことである。「滑舌が悪い」、「発音が不明瞭」、「聞き取りにくい」、「マイクの使い方が下手」などの指摘が一部の教員に集中している。教員はアナウンサーではないのだから、マイクを上手に使うことで明瞭に話す技術を全員が持つことは不可能だと思うが、100～200 人規模の講義では、授業内容以前の問題として一人一人の受講者に声が届くことが重要なようである。逆に考えると、この問題（加えて、板書の文字の見やすさ・読みやすさ、視聴覚教材の見やすさ）を解決するだけで授業評価のポイントは上がるだろう。

5. 今後の改善に向けて

授業評価は個々の教員が自分の授業を振り返り、自己努力による改善の参考になるだけでも大いに効果があるが、このデータを学部の FD 活動に利用すればさらに有効と思われる。現代心理学部においては、2009 年度に FD 委員会でこのアンケート結果をさらに深く分析して、改善のポイントをファカルティ・メンバーと兼任講師の先生方に情報発信するとともに、とくに心理学科と映像身体学科の間で、教員相互の授業訪問や授業研究を行って、高い評価を受けている教員の授業スキルの水平展開をはかりたい。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 集計データからみられる結果のまとめ

全学共通カリキュラム（以下全カリ）では、2008年度のアンケート対象科目を総合A群の講義系科目を担当する1教員1科目として実施した。2007年度は大人数授業の課題を検討するため、履修者数100名以上の科目を担当する1教員1科目としていたが、2008年度は2006年度以前と同一の基準に戻した。

今年度の回答者数は20,026名、回答率は54.73%であった。各学部の回答者数が千単位のオーダーであることからすれば全カリの回答数は突出して多いものであった。回答率は全学平均値（55.88%）とほぼ同様の値を示した。

各項目の平均値を同一対象科目の条件にて実施した2006年度における結果（同じ質問項目）と比較すると、すべての項目で2006年度を上回りスコアが上昇していた。

「IV総合的にみて、この授業は…」の評価においても、「1わかりやすい授業だった」「2授業全体の目標が明確だった」「3学問的興味をかきたてられた」「4この授業を受けて満足した」のすべての項目で平均値が向上し、評価4（そう思う）に近づいている。なかでも全カリの特徴としてあげられていた授業の静粛性の項目が大きく改善された（2006年度3.37、2008年度3.71）。このことについては、全体的なクラスサイズの増加を抑制するために、抽選登録対象科目の増加させたことも評価を高めた要因であろう。また、担当者連絡会や担当者に対する個別面談など全カリをあげて取り組んできた大人数科目への対策が功を奏したものと考えられる。しかしながら、まだ標準偏差が他の項目に比べて大きいため、一部のクラスでは問題が残っていることも推察できる。

全カリ科目履修者の学年分布は、全学の分布と傾向が大きく異なり（1:2:3:4学年、43.5%:29.1%:19.3%:5.4%）、特に、1学年の比率が高く、全カリの回答には1学年学生の評価が強く反映しているものと思われる。この学年別の比率は2006年度と比較すると（1:2:3:4学年、49.2%:32.0%:11.9%:7.0%）、低学年が低くなり、高学年が高くなる傾向がみられる。このことは全学年に向けてのカリキュラムを提供するという全カリの理念に少しずつではあるが近づいていると考えられる。以上のことをふまえて、各項目に関してしてみると、「授業の予習復習等に毎週当てた時間」や「自分で調べ、考える姿勢」などの項目の評価が比較的低いことがわかる。1年次、2年次が多い全カリで、これらの学習に対する取り組みが改善されたら学部教育に関しても良い影響が出てくるのではないかと考えられる。

担当教員の授業運営が問われている「IIこの授業の進め方は…」と「IV総合的にみて、この授業は…」では、ほとんど評価4に近い値になっており、教員の授業改善に対する真摯な対応が窺われた。一方で教室の大きさや設備環境を聞いた設問でも評価4をこえる高い評価になってきている。教員側からすれば、大規模授業や教室の設備に関することなど課題は多いものの学生側からの不満は少なくなっている。

2. 担当教員からの所見票に対するまとめ

対象科目が膨大なため、下記5、各研究室の総評に記述する。

3. 学生からの意見（記述による評価）の集約

今年度の学生からの意見の特徴は、授業内容に関するものは少なく、パワーポイントや視聴覚教材の活用や CHORUS の利用についてのコメントが多かったことである。その多くは肯定的な意見で、興味をもてた、授業がわかりやすかったというものが挙げられていた。否定的評価として多かったのは、板書のわかりにくさや声が小さくてきこえないといったことであった。この点に関しては全カリ総合科目に共通していることで、担当者の工夫によって改善できる事柄であろう。

また、授業の専門性、内容のレベルに関してはそう反する意見が出されており、全学部、全学年を対象とする授業の難しさを表していた。しかし、このような具体的な学生の指摘は授業を運営していく際の貴重な資料となることは間違いない。

4. 今後の授業改善に向けた課題の提示

全カリ総合科目の授業改善に向けた課題は2点に集約される。2008年度、全カリ委員で取り組んできた大規模授業を中心とした授業参観、担当教員の面談などで全体的には改善されてきた「授業に静粛性」について、151名以上のクラスについても改善させること、これまでの調査で数値が低い「授業の予習復習等に毎週あてた時間」の項目の数値を上げることである。次年度に向けて全カリでは、静粛性については151名以上の大規模授業において3.26から3.50に数値目標を設定して取り組んでいきたい。また、4月の全カリガイダンスのなかで、授業における私語については、周りの学生に対する授業を受ける権利の侵害、教員に対しても授業を遂行することへの妨害行為であるといったはっきりとした説明が必要ではないかと思われる。さらに全カリ科目は予習復習をしなくても良いというイメージを払拭するために、具体的な改善方法を検討していくことが必要となるであろう。このことについては、全カリにおける教育目的、学習成果などを確認し、どのような予習復習が必要かを検討するところからはじめていきたい。

そして、2009年度から実施する2回の抽選登録によって、「静粛性」、「教室の大きさ」や「受講者数の適正」の質問項目がどのように変動するかについても注目したい。

5. 各教育研究室からの総評

5-1 人文学教育研究室

「表8 学科等平均値」によれば、「この授業の進め方」、「この授業から得るものができたこと」、「総合的にみて、この授業は」の設問に対する回答が、「人間への探究」と「芸術・文化への招待」において、他のカテゴリーにおけるより、低い評価を示している。とくに「人間への探究」ではどの設問でもほぼ最低の数値を示している。しかしその評価の数値だけで、その評価が実質的に低かったと単純には言えないと思う。その理由は次のとおりである。

「表7 学年別平均値」に示されているように、学年が上がるにつれて、評価が上がっていることが考慮されなければならない。「わかりやすさ」、「目標の明確さ」、「学問的興味」、「満足度」は、学年と共に高まるが、このことはとくに「人間の探究」のような、人生経験を必要とする科目について顕著でないかと推測される。したがって平均値が低

いからと言って、その科目の評価を低いものとして確定することはできない。少数の高学年生にとって、きわめて「わかりやすく」、「満足いく」ものでありうるからである。

それと関連して、「人間の探究」の科目担当者の所見に、「1年から4年までを含む聴講者への授業の困難さ」が述べられている。また別の担当者によれば「この授業によって興味関心が深まった学生とそうでない学生の評価の二極化が印象的である」と言われている。二極化の場合、単に平均値を出すだけでは、評価の実情をとらえることにならない。

今後アンケートの集計において学年ごとの評価も考慮する必要があるろうし、さらにカリキュラムにおいても学年別に傾斜をつけた科目配当があっても良いかも知れない。

とはいっても精神的成熟度は単純に学年段階と対応するとは限らないし、また全学共通カリキュラムの制度上、そのような学年区分は困難かも知れない。

ただ今回の集計結果において、「人間の探究」における評価数値が低かったことについて、単純に平均値では割り切れない問題があることを指摘したい。もしかしたら、学生の「記述による評価」の中に、評価平均数値は低くても、きわめて高い評価がされている科目があるかも知れない。

5-2 社会科学教育研究室

社会科学教育研究室では『社会への視点』のカテゴリーを運営している。他の5つのカテゴリーとの比較では、評価点が1位の項目は「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(2.91)のみであり(『芸術への招待』と同得点)、全項目において抜きんでて評価の高い項目はない。もっとも、評価の低い項目はなく、全体として平均値に近い。過去の実績(2005年度・2006年度)との比較では、設問が変わったものを除き、ほとんどの項目で過去の評価を上回っていることを踏まえると、学生からは概ねより高い評価を受けたといえるだろう。

これは、ひとつには、各教員による地道な改善努力の成果だといえる。たとえば、視聴覚教材等を活用したり、グループ・ディスカッション等の参加型・対話型の授業を採り入れたりといった取組を行っていることが、個票の所見欄から読み取れる。ただ、もうひとつには、今年度においては大人数授業科目が比較的少なかったことが挙げられよう。全カリの場合、講義系科目の平均的な履修者数は池袋で200人を超える。数百人を超える履修クラスと数十人のクラスが同じ基準で評価されること自体、アンフェアである。履修規模が大きい場合は、そのことを考慮した評価がなされるべきである。

また、全カリのように学部も学年も雑多な授業と、一定のディシプリンを共有できている授業とでは、求められるスキルは異なることも考えられる。学生の知識レベルや関心が多様な状況において、学生の満足度が主たる評価軸になっていくと、「多少学生受けが悪くても本質を理解してもらいたい」といった骨太の授業がやりにくい状況を生み出してしまう危惧もある。たとえば、今回の評価を過去の実績と比較すると、「授業内容の量」「内容の明確性」「わかりやすさ」で高いのびが確認できたが、このことは、裏を返せば学生が理解しやすいと思われる程度にまでレベルを下げたという見方もできる。加えて、視聴覚教材をふんだんに採り入れれば、その分教えられる内容量は制約されるは

ずである。

以上を勘案すると、社会科学教育研究室としては、授業評価の評価点に関しては好ましい傾向に向かっているといえるものの、その数値を左右するのはクラスサイズの多寡という個々の教員による自助努力を超えた問題に起因している面があること、また、数値による安易な評価は、授業の質の向上にとってかえってマイナスの影響を及ぼしかねないということ、この2点を確認しておきたい。

5-3 自然科学教育研究室

自然科学教育研究室が運営するカテゴリ『自然の理解』のアンケート結果の平均値は、アンケート26項目にわたって、全カリ総合科目の他のカテゴリと比較して特に目立って高い項目も低い項目もなかった。ただし、カテゴリ平均を構成する個々の授業についてのアンケート結果は著しくばらついており、これらの平均をとることにどんな意味があるのか疑問に感じるほどである。

個々の教員による所見からは、授業評価アンケートによって教員が自らの授業の問題点を意識し、改善すべきところは改善しようとする姿勢が伝わってくる。また、学生が授業を受ける際のあるべき心構えについて教員の考え方が整理される様子もうかがえる。このアンケートは、教員があるべき授業について真剣に考え、学生にどのような態度で授業を受けさせるべきかを意識する上で、意義があるものと考えられる。

一方で、収集されたデータの活用ということでは改善すべき点があるように思われる。学生による授業評価アンケートは2004年度から毎年実施され定着してきたと思う。学生によって授業評価がおこなわれるということ自体の意義以上に、この膨大なデータ全体から何を読み取りどのように今後の授業運営に役立てていくのかについて大学として系統的に取り組むべきではないか。大きなばらつきのあるデータをもつ多数の授業をある一つの方法でカテゴリに分けてそれらの平均値を並べることにはそれほど大きな意味はない。それよりは、たとえば「静粛性に支障が生じない履修者数は何人までか」「ある規模の授業を円滑に運営するのに必要なTAは何人か」といった、授業を運営する側が経験的につかんでいる数字を統計的な分析によって検証するといった試みも重要ではないかと思う。もちろんこれに類したことは一部すでに実施されている。これをより系統的に行うことが収集されたデータを有効に利用することにつながるだろう。

5-4 情報科学教育研究室

『情報』のアンケート集計結果を大分類にしたがって見てみる。はじめの『授業へのあなたの取り組み方』であるが、出席率、予習・復習の時間、など全体的に低い数値になった。シラバスが役立ったかという質問は他の授業を若干上回った。次の『この授業の進め方』であるが、他の授業を上回っているものに、「静粛性が保たれた」、「レジュメや参考文献が効果的だった」、「映像視覚教材が効果的だった」、「授業の準備を周到に行っていた」、などの項目があった。次の『授業から得るものができたこと』については、「基本的な専門知識」が高い数値であるが、「新しい考え方・発想」についてはやや低い数値になった。次の『総合的・・・』については「目標が明確」、「授業を受けて満足し

た」がやや高いのに対し、「学問的興味をかきたてられた」が低い数値となった。

以上の結果を踏まえて考えてみると、『情報』の授業は予習・復習がしにくく、新しい考え方や発想につながらなかった、ということが言える。『情報』の基礎的な理論は自然科学分野であり、実際の授業では『情報』の応用や社会的利用などが論じられる矛盾性が影響しているかもしれない。ただし授業内容そのものについては、視覚教材が効果的に使われた、基本的な専門知識が得られた、授業に満足した、など他の授業と比べて評価は低くないという結果になった。評価が低かった項目についてどのように改善していくかは、大学における『情報』の授業のあり方とともに論じていかなければならないだろう。

5-5 スポーツ人間科学教育研究室

本研究室は「心身への着目」を運営しており、2006年度同様に学科等平均値では概ね好成績を収めている。しかし、「十分な静粛性が保たれた」は比較的低い評価となっている。本研究室運営科目の履修者数が多い傾向にあることも影響していると考えられるが、個別の所見票にあたってみると大人数教室が必ずしも静粛性が保たれていないわけではないため、研究室全体としての課題として認識し、改善を図りたいと考える。その他としても、「授業の予習復習等に毎週当てた時間」は平均で 1.53 時間と全体から見れば短く、「自分で調べ、考える姿勢」も 3.13 と決して高い値とは言えない。今後は、授業内容の理解度、満足度に高いポイントが得られていることを維持しつつ、主体的に学ぶ姿勢に関する項目においても高得点が得られるようにすることを心がける必要があるだろう。

個々の所見票にあたってみると、各教員が授業に対して一部で試行錯誤しながらも、真剣に向かっている様子が窺える。個別には、あまりにも履修生数が多数であること、履修生数に対して教室が小さすぎることなどへの改善を求める声もあがっており、大学全体として授業環境整備についてより一層の検討をしていただくことを研究室として要望したい。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

講座では、各教員の代表的な講義科目について、1 教員 1 科目の授業評価を継続して行っている。これは、各教員の授業改善の成果を経年的に追跡するためである。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

まず、講座の回答率 75.68%は全学の平均値 53.53%と比較して高い回答率である（表 2 参照）。この回答率は、授業への出席率をそのまま反映しているので、学生たちの講座の授業への積極的な関与が読み取れる。

次に、設問項目別平均値（表 4）を見ると、IVの「総合的」評価では、IV1「わかりやすい授業だった」4.13、IV2「授業全体の目標が明確だった」4.09、IV4「この授業を受けて満足した」4.02 と、いずれも 4 点を越す高評価であった。他の項目もほとんどが 3 点代後半から 4 点台の平均値で全般として、講座の科目の学生からの授業評価はおおむね高いものと判断できる。

その中で、特に低得点の項目についてみると、I6「授業の予習復習等に毎週当てた時間」1.83 と、1 時間未満という結果であった。また、III「この授業から得ることができたこと」において、III3「自分で調べ、考える姿勢」3.46 と比較的高い得点ではないことから、学生の発展的な学習には結び付いていないことがわかる。この点に関しては今後改善を考える必要があろう。

次に、2007 年度と 2008 年度の平均値の変化（表 4）を見ると、III「この授業から得ることができたこと」において、III4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」3.80 に変化がなかった以外、すべての項目で有意な平均値の上昇が見られた。講座の各教員の授業改善の成果が現れているといえるだろう。

さらに、授業規模別平均値（表 6）を見ると、全体的に平均値は高得点であるが、受講生 50 名以下の授業が、より多人数の授業より高得点であることがわかる。特に、II5「十分な静粛性が保たれた」で、101 名～150 名の授業では 3.73、50 名以下の授業では 4.50 と得点に大きな開きがあり、静粛性については、授業規模の要因が大きく影響していることがわかる。授業改善のためには、教員個人の努力とともに、授業規模のような大学全体として問題である授業環境の改善を常に心がけなければならないだろう。

3. 担当教員からの所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業評価に関する担当教員の所見を概観すると、総合的な評価に関しては「おおむね好評と判断する」「おおむね好意的な評価」などの学生からの評価を肯定する記述が多く見られた。一方で、「自分で調べ、考える姿勢」が相対的に低く、対策を考えたいなど、改善への方向性を所見も少なからずあった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

記述による評価に対する担当教員の所見は、各授業の授業方法、学習環境などの具体

的内容についての所見が多い。体験型授業、ロールプレイ、グループワークによる参加型授業、マイクロティーチング等への学生からの意見要望に応える教員の所見が多くあった。教員の授業の工夫と学生の意見を取り入れる姿勢が読み取れる。また、それ以前に各教員がいろいろな教授法を取り入れ実践していることに驚く。

また、学習環境として、教室の狭さ、演習授業での固定機の使いづらさに関する記述も散見された。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

「学生からは非常によい評価を得ているが、さらなるスキルアップを目指したい」という記述に代表されるように、学生からの意見を活かし、授業技術、方法などをさらに改善していくという記述が目立った。

しかし一方で、「改善の努力はしています。残念ながら、こうした質問の機械的な繰り返しと、それに答えるだけ義務づけて、アンケートをしたという形式自体に満足されているらしいことに、立教大学にしてどうかといささか失望を禁じ得ません」という厳しい意見もある。やはり、兼任講師、学生の皆さんにも、さらなるていねいな分析結果のフィードバック、大学としてすでに行っている授業改善の努力の丁寧な説明、改善努力の結果の伝達を大学として行っていく努力の必要性を痛感する。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

授業方法に関して、リアクションペーパー・小レポートの活用、討論の取り入れ、特に視聴覚教材の活用、プリントの作成・配布などが肯定的に評価されている。次に授業内容に関しては、授業のねらいが明確であること、体験を中心とした授業であること、作業を中心とした授業であること、実践的な内容を中心とした授業であることなどが肯定的に評価されている。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

否定的評価の意見としては、少数ではあるが、板書をもっとして欲しかった、教室の問題（狭すぎる、広すぎる、机が使いづらいなど）、出席の取り方への不満などがあげられていた。

5. 今後の授業改善に向けて

講座の授業に関してはおおむね高い評価を得ていると見ることができる、各担当教員の授業に対するさまざまな工夫と努力が結果から読み取れる。特に、授業のねらいの明確化、視聴覚教材の活用、リアクションペーパーの活用、グループ活動の導入などを積極的に試みている授業の評価が高い。こうした方向への各教員のさらなる努力と、効果の上がっている授業運営、授業方法などの教員間での共有が必要であろう。

また、多人数クラスでの授業運営の難しさ、学生からの不満も少なからずあり、1クラスの人数規模をどう考えていくかも課題である。この課題は講座だけで対応できる課題ではなく、全学的に教室の配置を検討する中に含まれる課題であると思われる。

5. 2008年度のまとめと今後の展望

2008年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長 藤原 新

「学生による授業評価アンケート」が2004年度に全学で施行されるようになって5年を経過した。この「アンケート」の目的は当初より

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修を行う機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

とされていた。最初の三年間は、③～⑤はもちろん、特に①、②の目的が意識され、教員一人1科目の講義を指定することを原則としたアンケートが行われてきた。昨年度からは⑥、⑦の目的についての意識が高まってきたことを受けて、学部によって一人1科目の原則にこだわらずにカリキュラム上特徴的な科目群についての集中的な調査も行われ、同時に科目群をいくつかのグループに分けて集計しそれぞれの特徴を析出する試みも行われている。

後者については、近年、初年次教育が重要であるとの認識が強まったことから、本年度は特に1年次生が履修する科目について集中的に調査を行う学部が目立った。

全体としての評価をみると、「アンケート」が始まって以来、学生からの評価は概して向上してきている。これは大多数の教員が「アンケート」を通じて寄せられた学生の声に真摯に応え、授業を改善したことが反映されていると思われる。とはいえ、教材の選定、表現方法など学生からの厳しい指摘はまだ多い。教員には今後も不断の努力が必要であろう。

「アンケート」から浮かび上がってきた多くの学部に通通の問題点としては、(1) 大人数講義科目にまつわる問題、(2) 学生の予習・復習の弱さ、があげられる。

(1)については、大人数講義科目で私語が多い傾向にあること、少人数科目に比べて授業評価が有意に低いことが挙げられる。教員の目の届きやすい少人数科目に比べて大人数科目の授業運営が難しいことは論をまたない。これまでもSAやTAの大人数講義への集中的な配当など必要と思われる対策は講じてきているが、その効果は必ずしも十分ではない。今後、講義の少人数化への努力を進めるとともに、大人数講義科目に適した教授法の開発と共有、それを支える教室設備の改善等が必要であろう。

(2)について、「アンケート」から、一般に「授業には出席するが、予習・復習など教室外の学習への取り組みが弱い」学生像が浮かび上がってくると感じている学部が多い。特に大学での学習習慣を身につけるべき初年次教育の段階において、教室外での学習が十分に行われていない状況は、大学生生活全体での成果を損ないかねない問題であり、看過できない。学生がもともと持っているはずの強い勉学欲求に期待するのみにとどまらず、学生の意欲をいかに引き出すか、あるいは漠然とした興味をいかに具体化し強い目的意識に変えていかと

いう教員の側の努力が求められる。まずは、教室外での学習を組み入れた形での授業運営の工夫が必要であろう。

冒頭でも触れたように全学での「学生による授業評価アンケート」は5回目を迎え、場合によっては、教員、学生双方にとってマンネリ化が指摘される時期でもある。状況に合わせた制度の見直し、科目選定の工夫は常に行わなければならないが、一方で、ある程度の期間にわたって経年で比較することの大切さも強調しておきたい。学生からの声を知り、授業を改善し、さらにその結果を次への改善の足掛かりとするという一連の流れを機能させるにはある程度の期間が必要だからである。毎年の工夫・改善がなければこの「アンケート」も同じことの繰り返しになりかねない。健全なフィードバックシステムが機能するよう、教員一人一人が努力するとともに、その努力を支援する取り組みが重要である。

「アンケート」には、学生の生の声書かれている。なかには授業の弱点を鋭く衝いた意見があるとともに、学生の未熟さに起因する一面的な評価も存在する。学生の要求や期待がどこにあるのかを知りその期待に応えることも大切だが、他方、学生の「ニーズ」に振り回されることなく、高等教育機関として果たすべき役割を常に意識して授業を行う必要がある。その意味で、学生の意見を教員の立場からしっかりと判断し取り入れるべきは取り入れるとともに、学生に対してはその授業の狙いがどこにあるのかをしっかりと伝え、学生の意識を高める努力がなされなければならないだろう。

これまで一部の学生が「アンケート」の趣旨を認識せず、極めて無責任な「わるふざけ」や「中傷」が行われたことが少なからず報告されてきた。今回、実施にあたって「アンケート」の意義や目的、学生が授業を評価することに伴う責任について時間をかけて伝える努力をしたこともあって、こうした心ない記述は減少したようである。学生の真摯な評価姿勢はこの制度の必須の前提条件であり、今後ともこの努力は継続していきたい。

この「アンケート」は期末の授業時間内に実施される。そのことで対象者が最後まで（あきらめずに）受講した学生というある意味での偏りをもつことはその性格上避けられない。その意味では、履修登録をしながらも途中から欠席するようになってしまった学生をいかに把握し、その意見をいかに集めるかが課題として残る。アカデミックアドバイザーなど、「アンケート」以外での学生の声の収集ルートを同時に活用し、総合的に判断を行う必要がある。

教員の研究・教育の能力を高めるFD活動も全学で推進されている。また、学生の力を高めるとともに、学生にとって分かりやすいカリキュラムの策定も全学で進められている。このアンケートがこうした動きをさらに推し進め、立教大学の教育水準の向上に寄与できるよう、努力したい。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数

延べ回答者数 78,783名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	2008年度			2007年度		
	履修者数	回答者数	回答率	履修者数	回答者数	回答率
文	11,001	7,565	68.77	11,678	7,826	67.01
経済	4,673	3,204	68.56	5,275	3,445	65.31
理	6,903	4,188	60.67	6,825	3,751	54.96
社会	15,357	8,862	57.71	13,970	7,852	56.21
法	17,850	6,350	35.57	19,172	6,483	33.81
経営	16,855	8,397	49.82	14,766	7,446	50.43
異文化コミュニケーション	1,001	791	79.02	2008年度新設学部		
観光	9,113	5,795	63.59	8,985	5,305	59.04
コミュニティ福祉	11,485	6,758	58.84	11,881	7,218	60.75
現代心理	6,485	4,074	62.82	4,145	2,845	68.64
全学共通カリキュラム	36,590	20,026	54.73	43,213	21,934	50.76
学校・社会教育講座	3,664	2,773	75.68	3,791	2,815	74.25
合計	140,977	78,783	55.88	143,701	76,920	53.53

注1) 履修者数・回答者数はアンケート実施科目の延べ履修者・回答者

注2) 学部等はアンケート実施科目の開設学部により分類した

注3) 2007年度数値に網掛けがある学部等は、実施科目の選定方針や対象科目を変更した学部等

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	4,071	1,808	1,228	303	155	7,565
経済	2,523	338	110	162	71	3,204
理	1,498	1,266	1,030	316	78	4,188
社会	2,800	2,947	2,370	545	200	8,862
法	1,625	1,501	2,152	944	128	6,350
経営	2,282	2,856	2,195	730	334	8,397
異文化コミュニケーション	719	0	4	0	68	791
観光	1,928	2,361	1,125	213	168	5,795
コミュニティ福祉	2,517	1,537	2,042	546	116	6,758
現代心理	1,686	1,486	791	23	88	4,074
全学共通カリキュラム	8,711	5,835	3,863	1,085	532	20,026
学校・社会教育講座	1,141	879	598	45	110	2,773
合計	31,501	22,814	17,508	4,912	2,048	78,783

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 科目開設学部等別平均値

表3 文学部 (2008年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,543	4.64	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	7,547	3.77	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,536	3.11	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,534	3.11	1.11
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	7,505	3.34	1.05
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,531	2.07	1.17
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,543	3.78	1.07
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,541	3.79	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,534	3.76	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,530	3.79	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,529	3.68	1.22
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,520	3.78	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	7,485	3.21	1.07
II 8 映像視覚教材(ビデオ、OHC、パワーポイントなど)の使用が効果的 だった	7,457	3.32	1.25
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,521	4.03	0.94
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,545	3.74	1.05
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,544	3.74	0.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,543	3.40	1.09
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,531	3.50	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,541	3.69	1.08
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,542	3.74	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,540	3.67	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	7,542	3.69	1.10
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	7,199	4.12	1.03
V 2 この授業の受講者数は適切だった	7,194	4.02	1.04

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表4 経済学部 (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,193	4.67	0.62
I 2 この授業に積極的に参加した	3,197	4.06	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,195	3.31	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,195	3.27	1.11
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	3,176	3.06	1.08
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	3,186	2.15	1.17
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,192	3.88	1.09
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,191	3.72	1.08
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,189	3.84	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,188	3.86	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,189	3.70	1.11
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,188	3.74	1.07
II 7 板書のしかたが適切だった	3,173	3.32	1.11
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	3,150	3.33	1.20
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	3,183	3.97	0.98
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,190	3.58	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,188	3.81	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,186	3.51	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,179	3.48	1.01
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,189	3.76	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,185	3.84	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,186	3.52	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	3,186	3.69	1.08
V 学部等による設問			
V 1 (基礎演習) みんなの前で自分の意見を言えるようになった	1,081	3.59	1.03
V 2 (基礎演習) 経済に関する文献を読めるようになった	1,079	3.53	0.99
V 3 (基礎演習) レジュメやレポートを作成できるようになった	1,082	3.87	0.97
V 4 (情報処理系科目) ワードプロソフト (Word) を使いこなせるようになった	1,429	3.86	0.96
V 5 (情報処理系科目) 表計算ソフト (Excel) を使いこなせるようになった	1,431	3.75	0.95
V 6 (情報処理系科目) WEB 上からデータをダウンロードし、分析できるようになった	1,429	3.57	1.03

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表5 理学部（2008年度平均値および2007年度平均値）

2007、2008年度とも科目選定方針が1教員1科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2008			2007		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	4,168	4.70	0.65	3,741	4.67	0.67
I 2 この授業に積極的に参加した	4,171	3.82	1.07	3,737	3.82	1.05
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,164	2.98	1.08	3,738	2.99	1.09
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,168	3.03	1.12	3,729	3.05	1.15
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	4,154	3.06	1.07	3,722	3.09	1.08
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	4,166	2.10	1.08	3,731	2.14	1.11
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	4,167	3.48	1.19	3,738	3.62	1.13 **
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,167	3.44	1.13	3,734	3.60	1.09 **
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,163	3.55	1.10	3,730	3.68	1.05 **
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,156	3.56	1.10	3,726	3.66	1.06 **
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,162	3.70	1.14	3,726	3.64	1.12 *
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,156	3.43	1.15	3,715	3.53	1.11 **
II 7 板書のしかたが適切だった	4,144	3.18	1.18	3,707	3.26	1.12 **
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	4,102	3.23	1.21	3,681	3.36	1.17 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,149	3.84	1.03	3,719	3.95	0.95 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,159	3.50	1.08	3,723	3.63	1.04 **
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,160	3.54	1.03	3,721	3.64	1.01 **
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,158	3.27	1.04	3,723	3.36	1.04 **
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,150	3.26	1.05	3,712	3.40	1.04 **
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	4,156	3.40	1.19	3,719	3.53	1.15 **
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,158	3.52	1.10	3,716	3.65	1.05 **
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,156	3.35	1.14	3,720	3.44	1.11 **
IV 4 この授業を受けて満足した	4,158	3.43	1.16	3,715	3.54	1.11 **
V 学部等による設問						
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	3,504	3.71	1.01	3,390	3.91	0.99 **

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いに思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注2) 回答者数は延べ人数

注3) *印は2007年度と2008年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p < .05$; ** $p < .01$

表6 社会学部 (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	8,841	4.57	0.71
I 2 この授業に積極的に参加した	8,840	3.67	1.01
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,826	2.93	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,827	2.93	1.07
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	8,786	3.28	1.04
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間)	8,822	1.76	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,833	3.72	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,835	3.77	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,828	3.74	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,816	3.76	1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,814	3.60	1.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,808	3.63	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	8,791	3.12	1.09
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的 だった	8,781	3.66	1.15
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,796	4.03	0.93
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,824	3.69	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,825	3.67	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,819	3.21	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,805	3.65	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,816	3.66	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,817	3.70	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,816	3.56	1.09
IV 4 この授業を受けて満足した	8,813	3.62	1.10

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表7 法学部（2008年度平均値および2007年度平均値）

2007、2008年度とも科目選定方針が1教員1科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2008			2007		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	6,333	4.41	0.93	6,459	4.39	0.91
I 2 この授業に積極的に参加した	6,328	3.66	1.09	6,455	3.58	1.06 **
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,323	2.84	1.05	6,452	2.82	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,320	2.86	1.12	6,443	2.85	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	6,292	3.25	1.08	6,420	3.21	1.08 *
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間）	6,317	1.88	0.97	6,448	1.87	0.97
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	6,329	3.70	1.18	6,452	3.79	1.12 **
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,328	3.77	1.02	6,448	3.72	1.04 **
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,318	3.76	1.05	6,450	3.72	1.02 *
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,312	3.79	1.05	6,441	3.75	1.03 *
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,315	3.90	1.08	6,444	3.84	1.10 **
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,308	3.70	1.09	6,435	3.61	1.13 **
II 7 板書のしかたが適切だった	6,274	3.16	1.14	6,400	3.13	1.14
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	6,223	3.18	1.22	6,349	3.12	1.24 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,305	4.01	0.94	6,431	3.94	0.96 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,319	3.66	1.04	6,447	3.63	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,315	3.73	1.00	6,444	3.75	0.95
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,317	3.19	1.03	6,442	3.14	1.01 **
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,304	3.63	1.04	6,434	3.62	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	6,316	3.69	1.15	6,442	3.66	1.10
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,317	3.75	1.05	6,439	3.70	1.01 *
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,315	3.60	1.12	6,441	3.57	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	6,317	3.69	1.12	6,442	3.63	1.08 **

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出（5:大にそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注2) 回答者数は延べ人数

注3) *印は2007年度と2008年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p<.05$; ** $p<.01$

表8 経営学部 (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	8,354	4.66	0.65
I 2 この授業に積極的に参加した	8,359	3.95	1.00
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8,354	3.31	1.08
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	8,344	3.29	1.11
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	8,316	3.33	1.08
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	8,332	2.23	1.22
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	8,351	3.85	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	8,352	3.82	1.05
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	8,343	3.88	1.03
II 4 各回の授業内容は明確だった	8,340	3.89	1.03
II 5 十分な静粛性が保たれた	8,330	3.65	1.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	8,315	3.68	1.10
II 7 板書のしかたが適切だった	8,253	3.40	1.09
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	8,312	3.79	1.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	8,319	4.11	0.93
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	8,344	3.81	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	8,339	3.84	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	8,334	3.55	1.08
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	8,322	3.73	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	8,338	3.81	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	8,338	3.87	1.04
IV 3 学問的興味をかきたてられた	8,340	3.69	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	8,336	3.78	1.11

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注2) 回答者数は延べ人数

表9 異文化コミュニケーション学部 (2008年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	788	4.82	0.45
I 2 この授業に積極的に参加した	790	3.70	1.05
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	790	2.88	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	789	2.87	1.14
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	789	2.72	1.06
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	788	1.78	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	790	3.69	1.21
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	790	3.57	1.08
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	787	3.33	1.15
II 4 各回の授業内容は明確だった	784	3.37	1.18
II 5 十分な静肅性が保たれた	787	3.19	1.23
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	789	3.45	1.10
II 7 板書のしかたが適切だった	786	2.97	1.08
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	783	3.21	1.28
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	787	3.81	1.03
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	787	3.60	1.13
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	788	3.43	1.07
III 3 自分で調べ、考える姿勢	788	3.36	1.12
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	787	3.28	1.10
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	790	3.38	1.21
IV 2 授業全体の目標が明確だった	789	3.29	1.18
IV 3 学問的興味をかきたてられた	789	3.22	1.24
IV 4 この授業を受けて満足した	790	3.28	1.21

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表10 観光学部（2008年度平均値）

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	5,778	4.66	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	5,782	3.81	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	5,774	2.98	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	5,771	2.94	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	5,745	3.25	1.07
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	5,759	1.75	0.97
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	5,778	3.78	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	5,776	3.88	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	5,774	3.79	1.06
II 4 各回の授業内容は明確だった	5,769	3.79	1.06
II 5 十分な静粛性が保たれた	5,770	3.56	1.15
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	5,760	3.78	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	5,734	3.28	1.06
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	5,757	3.83	1.01
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,758	4.06	0.94
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	5,774	3.66	1.01
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	5,772	3.73	0.99
III 3 自分で調べ、考える姿勢	5,771	3.24	1.04
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	5,763	3.53	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	5,775	3.69	1.13
IV 2 授業全体の目標が明確だった	5,774	3.72	1.08
IV 3 学問的興味をかきたてられた	5,775	3.59	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	5,776	3.66	1.12
V 学部等による設問			
V 1 わたしの成績は、観光学部の中で良いほうだ	5,596	2.88	0.96
V 2 わたしは、授業中に、飲食や私語をすることを好ましくないと思う	5,633	3.91	1.01
V 3 わたしは、新座キャンパスで学ぶことに満足している	5,635	4.01	1.04
V 4 わたしは、旅行することが好きだ	5,631	4.52	0.78
V 5 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	5,628	3.62	1.05
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	5,635	3.48	1.14
V 7 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	5,634	3.57	1.12

注1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注2) 回答者数は延べ人数

表 1 1 コミュニティ福祉学部 (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,748	4.50	0.72
I 2 この授業に積極的に参加した	6,746	3.76	0.96
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,735	3.01	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,730	3.03	1.08
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	6,697	3.39	1.02
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,722	1.64	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,739	3.89	1.03
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,735	3.95	0.91
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,734	3.90	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,729	3.91	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,702	3.92	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,703	3.82	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	6,651	3.28	1.04
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	6,685	3.78	1.09
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,703	4.13	0.86
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,737	3.85	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,736	3.79	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,736	3.34	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,727	3.79	0.94
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,737	3.82	1.04
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,737	3.86	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,737	3.67	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	6,736	3.81	1.05

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 2 現代心理学部 (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,071	4.62	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	4,070	3.78	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,067	2.94	1.06
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,062	2.97	1.12
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	4,050	3.28	1.07
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,064	1.79	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,068	3.71	1.13
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,065	3.87	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,063	3.77	1.03
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,061		1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,058	3.89	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,054	3.74	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	4,043	3.11	1.02
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	4,039	3.82	1.09
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,054	4.14	0.89
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,054	3.89	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,056	3.77	0.97
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,055	3.22	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,051	3.59	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,058	3.63	1.15
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,055	3.74	1.04
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,056	3.76	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	4,056	3.76	1.09

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 3 全学共通カリキュラム (2008 年度平均値)

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	19,979	4.58	0.72
I 2 この授業に積極的に参加した	19,978	3.73	1.04
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	19,957	2.89	1.07
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	19,939	2.86	1.12
I 5 シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	19,871	3.38	1.10
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間 (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	19,937	1.61	0.94
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	19,962	3.88	1.08
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	19,950	3.91	0.97
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	19,946	3.84	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	19,919	3.87	1.01
II 5 十分な静肅性が保たれた	19,919	3.71	1.18
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19,879	3.71	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	19,774	3.23	1.09
II 8 映像視覚教材 (ビデオ、OHC、パワーポイントなど) の使用が効果的だった	19,763	3.81	1.16
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	19,868	4.13	0.91
III この授業から得るものができたこと			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	19,932	3.79	1.02
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	19,923	3.68	0.98
III 3 自分で調べ、考える姿勢	19,922	3.14	1.05
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	19,879	3.64	1.04
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	19,921	3.84	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	19,912	3.81	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	19,911	3.69	1.10
IV 4 この授業を受けて満足した	19,910	3.76	1.10
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	17,089	4.03	1.08
V 2 この授業の受講者数は適切だった	17,057	3.86	1.09
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	17,020	4.03	0.99

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出 (5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

注 2) 回答者数は延べ人数

表 1 4 学校・社会教育講座（2008 年度平均値および 2007 年度平均値との比較）

2007、2008 年度とも科目選定方針が 1 教員 1 科目で比較可能であるため、両年度の数値を掲載した

設 問 項 目	2008			2007		
	回答者数	平均値	標準偏差	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…						
I 1 授業全体を通じての出席率（5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満）	2,767	4.75	0.52	2,805	4.72	0.57 *
I 2 この授業に積極的に参加した	2,769	4.01	0.91	2,801	3.83	0.97 **
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,764	3.19	0.98	2,801	3.04	1.02 **
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,762	3.20	1.05	2,800	3.05	1.10 **
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	2,758	3.49	1.00	2,791	3.35	1.05 **
I 6 授業の予習復習等に毎週当てた時間（5:3 時間以上、4:2-3 時間、3:1-2 時間、2:1 時間未満、1:0 時間）	2,763	1.83	1.00	2,798	1.71	0.91 **
II この授業の進め方は…						
II 1 聞きやすい話し方だった	2,766	4.23	0.93	2,806	4.06	1.01 **
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,767	4.10	0.91	2,805	4.02	0.94 **
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,762	4.13	0.90	2,802	4.02	0.97 **
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,764	4.17	0.88	2,799	4.04	0.96 **
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,763	4.25	0.93	2,801	3.95	1.09 **
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,764	4.03	0.94	2,799	3.93	0.98 **
II 7 板書のしかたが適切だった	2,758	3.52	1.07	2,799	3.36	1.09 **
II 8 映像視覚教材（ビデオ、OHC、パワーポイントなど）の使用が効果的だった	2,753	3.77	1.12	2,782	3.65	1.17 **
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,756	4.31	0.80	2,792	4.24	0.84 **
III この授業から得るものができたこと						
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,767	3.95	0.94	2,804	3.89	0.97 *
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,767	3.96	0.86	2,806	3.89	0.91 **
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,766	3.46	1.00	2,800	3.35	1.04 **
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,763	3.80	0.94	2,794	3.81	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…						
IV 1 わかりやすい授業だった	2,767	4.13	0.94	2,804	4.01	1.01 **
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,766	4.09	0.92	2,803	3.99	0.98 **
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,767	3.80	1.05	2,804	3.66	1.09 **
IV 4 この授業を受けて満足した	2,767	4.02	0.98	2,802	3.86	1.05 **

注 1) 平均値は各選択肢の評価点を使用して算出（5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない）

注 2) 回答者数は延べ人数

注 3) *印は 2007 年度と 2008 年度の平均値に統計的に有意な差があることを示す。* $p<.05$; ** $p<.0.1$

6-3 「グループ集計」科目一覧

表15 文学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	入門演習 A1	前期
2	入門演習 C1	前期
3	入門演習 C1	前期
4	入門演習 C1	前期
5	入門演習 E1	前期
6	入門演習 E1	前期
7	入門演習 F1	前期
8	入門演習 F1	前期
9	入門演習 F1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	入門演習 G1	前期
2	入門演習 G1	前期
3	入門演習 G1	前期
4	入門演習 G1	前期
5	入門演習 G1	前期
6	入門演習 G1	前期
7	入門演習 G1	前期
8	入門演習 G1	前期
9	入門演習 G1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	入門演習 J1	前期
2	入門演習 J1	前期
3	入門演習 J1	前期
4	入門演習 J1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	入門演習 B1	前期
2	入門演習 B1	前期
3	入門演習 B1	前期
4	入門演習 B1	前期
5	入門演習 B1	前期
6	入門演習 B1	前期
7	入門演習 B1	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎演習 1	前期
2	基礎演習 1	前期
3	基礎演習 1	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	英語基礎演習 1	前期
2	ドイツ語基礎演習 1	前期
3	ドイツ語基礎演習 1	前期
4	ドイツ語基礎演習 1	前期
5	ドイツ語基礎演習 3	前期
6	ドイツ語基礎演習 3	前期
7	ドイツ語基礎演習 3	前期
8	フランス語基礎演習 1	前期
9	フランス語基礎演習 3	前期
10	フランス語基礎演習 3	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	演習 G1	前期
2	演習 G3	前期
3	演習 G5	前期
4	演習 G11	前期
5	演習 H1	前期
6	演習 H3	前期
7	演習 H5	前期
8	演習 H7	前期
9	演習 H9	前期
10	演習 I1	前期
11	演習 I3	前期
12	演習 I7	前期
13	演習 I9	前期
14	音楽学演習 1	前期
15	演習 F1	前期
16	演習 F3	前期
17	演習 F5	前期
18	演習 F7	前期
19	演習 F9	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	キリスト教文化講義 1	前期
2	キリスト教文化講義 3	前期
3	心理学 1	前期
4	宗教思想 1	前期
5	倫理思想	前期
6	ドイツ語圏文化概論	前期
7	フランス文学・文化概論	前期
8	日本語学概論 1	前期
9	漢文学概論	前期
10	文芸・思想概論	前期
11	世界史概論 1	前期
12	日本史概論 2	前期
13	超域文化学概論	前期
14	教育と宗教	前期

グループ9

No.	科目名	学期
1	文学講義 7	前期
2	文学講義 11	前期
3	文学講義 13	前期
4	文学講義 15	前期
5	文学講義 19	前期
6	文学講義 20	前期
7	文学講義 21	前期
8	文学講義 23	前期
9	文学講義 25	前期
10	文学講義 27	前期
11	文学講義 29	前期
12	文学講義 31	前期
13	文学講義 33	前期
14	文学講義 35	前期
15	文学講義 37	前期
16	文学講義 39	前期
17	文学講義 41	前期

グループ10

No.	科目名	学期
1	文学講義 101	前期
2	文学講義 301	前期
3	文学講義 305	前期
4	文学講義 309	前期

グループ11

No.	科目名	学期
1	ヘブライ語 1	前期
2	ギリシア語 1	前期
3	ラテン語 1	前期

グループ12

No.	科目名	学期
1	情報処理 1	前期
2	情報処理(PCプレゼンテーション)3	前期

グループ13

No.	科目名	学期
1	キリスト教文化講義 2	後期
2	キリスト教文化講義 4	後期
3	合同講義 2	後期
4	宗教思想 2	後期
5	日本文学概論	後期
6	世界史概論 2	後期
7	日本史概論 1	後期
8	教育制度・政策論	後期
9	家庭教育論	後期
10	入門講義 1	後期
11	文学講義 8	後期
12	文学講義 102	後期
13	文学講義 304	後期
14	文学講義 308	後期
15	文学講義 312	後期
16	文学講義 314	後期

グループ14

No.	科目名	学期
1	演習 G2	後期
2	演習 G4	後期
3	演習 G6	後期
4	演習 G12	後期
5	演習 H2	後期
6	演習 H4	後期
7	演習 H6	後期
8	演習 H8	後期
9	演習 H10	後期
10	演習 I2	後期
11	演習 I4	後期
12	演習 I8	後期
13	演習 I10	後期
14	演習 F4	後期
15	演習 F6	後期
16	演習 F8	後期
17	演習 F10	後期

グループ15

No.	科目名	学期
1	入門演習 J2	後期
2	入門演習 J2	後期
3	入門演習 J2	後期
4	入門演習 J2	後期
5	入門演習 C2	後期
6	入門演習 C2	後期
7	入門演習 C2	後期
8	入門演習 D2	後期
9	入門演習 D2	後期
10	入門演習 D2	後期
11	入門演習 E2	後期
12	入門演習 E2	後期
13	入門演習 E2	後期
14	入門演習 E2	後期
15	入門演習 E2	後期
16	入門演習 F2	後期
17	入門演習 F2	後期
18	入門演習 F2	後期

グループ16

No.	科目名	学期
1	キリスト教学基礎演習	後期
2	基礎演習 2	後期
3	基礎演習 2	後期
4	ドイツ語基礎演習 4	後期
5	ドイツ語基礎演習 4	後期
6	ドイツ語基礎演習 4	後期
7	ドイツ語基礎演習 5	後期
8	ドイツ語基礎演習 5	後期
9	ドイツ語基礎演習 5	後期
10	フランス語基礎演習 4	後期
11	フランス語基礎演習 5	後期
12	日本文学講読 6	後期

グループ17

No.	科目名	学期
1	実作・実践講義 2	後期
2	情報処理 2	後期
3	情報処理(PCプレゼンテーション)4	後期

表 1 6 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期
6	情報処理入門	前期
7	情報処理入門	前期
8	情報処理入門	前期
9	情報処理入門	前期
10	情報処理入門	前期
11	情報処理入門	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	前期
2	経済情報処理A	前期
3	経済情報処理A	前期
4	政策情報処理A	前期
5	経営情報処理A	前期
6	財務情報処理A	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	基礎演習（経済学科）	前期
2	基礎演習（経済学科）	前期
3	基礎演習（経済学科）	前期
4	基礎演習（経済学科）	前期
5	基礎演習（経済学科）	前期
6	基礎演習（経済学科）	前期
7	基礎演習（経済学科）	前期
8	基礎演習（経済学科）	前期
9	基礎演習（経済学科）	前期
10	基礎演習（経済学科）	前期
11	基礎演習（経済学科）	前期
12	基礎演習（経済学科）	前期
13	基礎演習（経済学科）	前期
14	基礎演習（経済学科）	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	基礎演習（経済政策学科）	前期
2	基礎演習（経済政策学科）	前期
3	基礎演習（経済政策学科）	前期
4	基礎演習（経済政策学科）	前期
5	基礎演習（経済政策学科）	前期
6	基礎演習（経済政策学科）	前期
7	基礎演習（経済政策学科）	前期
8	基礎演習（経済政策学科）	前期
9	基礎演習（経済政策学科）	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
2	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
3	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
4	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
5	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
6	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
7	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
8	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期
9	基礎演習（会計ファイナンス学科）	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	情報処理入門2	後期
2	情報処理入門2	後期
3	情報処理入門2	後期
4	情報処理入門2	後期
5	情報処理入門2	後期
6	情報処理入門2	後期
7	情報処理入門2	後期
8	情報処理入門2	後期
9	情報処理入門2	後期
10	情報処理入門2	後期
11	情報処理入門2	後期

表 17 社会学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法1	前期
3	社会学データ実習	前期
4	現代社会理論	前期
5	ジェンダーの社会学	前期
6	比較社会論	前期
7	現代社会変動論	前期
8	質的研究法	前期
9	公共性の社会学	前期
10	自己の社会学	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	家族社会学	前期
2	地域社会学	前期
3	福祉の社会学	前期
4	逸脱の社会学	前期
5	フィールドワークの技法	前期
6	生命・身体社会学	前期
7	計量社会学	前期
8	多変量解析	前期
9	社会学史	前期
10	保健・医療の社会学	前期
11	産業システム変動論	前期
12	歴史社会学	前期
13	現代社会研究5(リスク社会論)	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	多文化社会とアイデンティティ	前期
2	多文化のデータ分析	前期
3	民族文化論	前期
4	宗教と社会	前期
5	都市生活構造論	前期
6	都市文化政策論	前期
7	住民ネットワーク論	前期
8	都市計画論	前期
9	生活環境論	前期
10	資源と環境	前期
11	環境教育論	前期
12	公共政策論	前期
13	環境のデータ分析	前期
14	国際協力NGO入門	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法2	前期
3	社会調査法2	前期
4	現代社会論	前期
5	マス・コミュニケーション論	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	国際関係論	前期
2	現代経済	前期
3	今日のメディアとジャーナリズム	前期
4	データ分析	前期
5	情報法	前期
6	情報ネットワーク論	前期
7	地域メディア論	前期
8	webスタディーズ	前期
9	グローバル・コミュニケーション論	前期
10	流行論	前期
11	エンターテインメント論	前期
12	広告論	前期
13	メディア理論	前期
14	コミュニケーション論	前期
15	映像文化論	前期
16	記号論	前期
17	メディアデザイン論	前期
18	メディアとジェンダー	前期
19	メディア・リテラシー	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法1	前期
3	社会学データ実習	前期
4	社会学原論	後期
5	社会調査法2	後期
6	社会調査法2	後期
7	現代社会学理論	前期
8	ジェンダーの社会学	前期
9	比較社会論	前期
10	現代社会変動論	前期
11	質的研究法	前期
12	公共性の社会学	前期
13	自己の社会学	前期
14	社会統計学	後期
15	コミュニケーションの理論	後期
16	現代社会と政策	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	多変量解析	前期
2	計量社会学	前期
3	社会学史	前期
4	フィールドワークの技法	前期
5	データ処理法	後期
6	情報処理	後期
7	逸脱の社会学	前期
8	意識変動論	後期
9	アイデンティティ論	後期
10	文化の社会学	後期
11	宗教社会学	後期
12	相互行為論	後期
13	産業システム変動論	前期
14	現代社会研究5(リスク社会論)	前期
15	歴史社会学	前期
16	世界システム論	後期
17	社会階層論	後期
18	人口動態学	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	家族社会学	前期
2	地域社会学	前期
3	福祉の社会学	前期
4	生命・身体社会学	前期
5	保健・医療の社会学	前期
6	高齢社会論	後期
7	少子社会論	後期
8	共生社会論	後期
9	ライフコース論	後期
10	現代社会研究3(臨床社会学)	後期
11	社会保障論	後期
12	政治学2	後期
13	平等と公正	後期
14	社会問題の社会学	後期
15	NPO/NGOの社会学	後期
16	シミュレーションの社会学	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	国際社会論1	前期
2	文化の社会理論	後期
3	社会調査法2	後期
4	社会学原論	後期
5	文化基礎論2	後期
6	国際社会論2	後期
7	現代社会論2	後期
8	多文化の社会理論2	後期
9	都市社会論2	後期
10	環境社会学2	後期
11	社会統計学2	後期
12	消費社会論2	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	多文化社会とアイデンティティ	前期
2	多文化のデータ分析	前期
3	民族文化論	前期
4	宗教と社会	前期
5	国際協力NGO入門	前期
6	教育社会学	後期
7	文化変容論	後期
8	エスニシティ論	後期
9	マイグレーションの社会学	後期
10	アジア社会論	後期
11	文化生産論	後期

グループ11

No.	科目名	学期
1	都市生活構造論	前期
2	都市文化政策論	前期
3	住民ネットワーク論	前期
4	都市計画論	前期
5	生活文化論	後期
6	都市とマイノリティ	後期
7	都市文化のデータ分析	後期
8	都市とメディア	後期
9	生活環境論	前期
10	資源と環境	前期
11	環境教育論	前期
12	公共政策論	前期
13	環境のデータ分析	前期
14	生態学	後期
15	環境と人類	後期
16	災害社会学	後期
17	社会心理学2	後期
18	環境の思想	後期

グループ12

No.	科目名	学期
1	社会学原論	前期
2	社会調査法2	前期
3	社会調査法2	前期
4	現代社会論	前期
5	マス・コミュニケーション論	前期
6	社会学原論	後期
7	社会調査法1	後期
8	情報社会論	後期
9	ジャーナリズム論	後期
10	メディア・コミュニケーション論	後期
11	情報行動論	後期

グループ13

No.	科目名	学期
1	国際関係論	前期
2	現代経済	前期
3	今日のメディアとジャーナリズム	前期
4	メディア社会特殊講義(1)	後期
5	メディア社会特殊講義(2)	後期
6	音楽をめぐるビジネスと法	後期
7	‘論’これからの放送メディア	後期
8	データ分析	前期
9	情報法	前期
10	情報ネットワーク論	前期
11	地域メディア論	前期
12	webスタディーズ	前期
13	グローバル・コミュニケーション論	前期
14	流行論	前期
15	情報産業論	後期

グループ14

No.	科目名	学期
1	エンターテインメント論	前期
2	広告論	前期
3	比較マスコミ論	後期
4	ジャーナリズム各論2(国際)	後期
5	ジャーナリズム各論3(映像報道論)	後期
6	メディア理論	前期
7	コミュニケーション論	前期
8	映像文化論	前期
9	記号論	前期
10	メディアデザイン論	前期
11	メディアとジェンダー	前期
12	メディア・リテラシー	前期
13	エスノメソドロジー	後期

表 1 8 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期

グループ4

No.	科目名	学期
1	BL3	後期
2	BL3	後期
3	BL3	後期

表 19 異文化コミュニケーション学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	ことばと人間	前期
2	コミュニケーション入門	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	言語学入門	前期
2	地域研究入門	前期
3	文化研究入門	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	ことばと人間	前期
2	コミュニケーション入門	前期
3	言語学入門	前期
4	地域研究入門	前期
5	文化研究入門	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎演習1	前期
2	基礎演習1	前期
3	基礎演習1	前期
4	基礎演習1	前期
5	基礎演習1	前期
6	基礎演習1	前期
7	ことばと人間	前期
8	コミュニケーション入門	前期
9	言語学入門	前期
10	地域研究入門	前期
11	文化研究入門	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	ことばと人間	後期
2	コミュニケーション入門	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	基礎演習2	後期
2	基礎演習2	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	ことばと人間	後期
2	コミュニケーション入門	後期
3	基礎演習2	後期
4	基礎演習2	後期
5	基礎演習2	後期
6	基礎演習2	後期
7	基礎演習2	後期
8	基礎演習2	後期

表20 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	基礎演習	前期
2	基礎演習	前期
3	基礎演習	前期
4	基礎演習	前期
5	基礎演習	前期
6	基礎演習	前期
7	基礎演習	前期
8	基礎演習	前期
9	基礎演習	前期
10	基礎演習	前期
11	基礎演習	前期
12	基礎演習	前期
13	基礎演習	前期
14	基礎演習	前期
15	基礎演習	前期
16	基礎演習	前期
17	基礎演習	前期
18	基礎演習	前期
19	基礎演習	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	福祉機器論	前期
2	※(社会福祉・精神保健福祉) 援助技術総論	前期
3	医学概論	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	障害者福祉論1	前期
2	精神医学1	前期
3	福祉環境論	前期
4	精神保健福祉援助技術各論1	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	福祉産業論	前期
2	ケアマネジメント論	前期
3	司法福祉論	前期
4	老年臨床心理学	前期
5	福祉学特論	前期
6	精神保健学1	前期
7	精神科リハビリテーション学1	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	コミュニティ政策入門	前期
2	少子高齢社会論	前期
3	地球コミュニティ論	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	健康政策	前期
2	国際経済論	前期
3	地方財政論	前期
4	ライフサイクルの心理学	前期
5	教育とカウンセリング(N)	前期
6	エスニシティ論	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	政策過程論	前期
2	教育政策	前期
3	福祉社会論	前期
4	災害心理学	前期
5	コミュニティ・サポート論	前期
6	福祉とレクリエーション	前期
7	障害者スポーツ論	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	運動方法学演習1	前期
2	運動方法学演習1	前期
3	生理学	前期
4	ウエルネスと医学	前期
5	運動方法学演習3	前期
6	運動方法学演習4	前期
7	解剖学	前期

グループ9

No.	科目名	学期
1	発達障害論	後期
2	福祉機器論	前期
3	※(社会福祉・精神保健福祉) 援助技術総論	前期
4	医学概論	前期

グループ10

No.	科目名	学期
1	社会福祉法制	後期
2	公的扶助論	後期
3	高齢者福祉実践論	後期
4	グループワーク	後期
5	精神保健福祉論1	後期
6	精神保健福祉論2	後期
7	家族臨床心理学	後期
8	障害者福祉論1	前期
9	精神医学1	前期
10	福祉環境論	前期
11	精神保健福祉援助技術各論1	前期

グループ11

No.	科目名	学期
1	福祉情報論	後期
2	リハビリテーション論	後期
3	社会福祉施設経営論	後期
4	リハビリテーション心理学	後期
5	医療ソーシャルワーク実践論1	後期
6	精神保健学2	後期
7	福祉産業論	前期
8	ケアマネジメント論	前期
9	司法福祉論	前期
10	老年臨床心理学	前期
11	福祉学特論	前期
12	精神保健学1	前期
13	精神科リハビリテーション学1	前期

グループ12

No.	科目名	学期
1	家族政策	後期
2	コミュニティと宗教	後期
3	コミュニティ政策入門	前期
4	少子高齢社会論	前期
5	地球コミュニティ論	前期

グループ13

No.	科目名	学期
1	政策科学	後期
2	福祉政策	後期
3	平和学	後期
4	世界と宗教	後期
5	余暇生活論	後期
6	コミュニティ・ビジネス	後期
7	健康政策	前期
8	国際経済論	前期
9	地方財政論	前期
10	ライフサイクルの心理学	前期
11	教育とカウンセリング(N)	前期
12	エスニシティ論	前期

グループ14

No.	科目名	学期
1	環境政策	後期
2	比較文化心理学	後期
3	異文化コミュニケーション	後期
4	パートナーシップ論	後期
5	NPO論	後期
6	障害者スポーツ実践論	後期
7	データ分析法	後期
8	コミュニティ政策特論	後期
9	政策過程論	前期
10	教育政策	前期
11	福祉社会論	前期
12	災害心理学	前期
13	コミュニティ・サポート論	前期
14	福祉とレクリエーション	前期
15	障害者スポーツ論	前期

グループ15

No.	科目名	学期
1	運動方法学演習2	後期
2	運動方法学演習2	後期
3	ウエルネス科学総論	後期
4	運動処方論	後期
5	スポーツ科学総論	後期
6	体カトレーニング論	後期
7	運動方法学	後期
8	運動方法学演習1	前期
9	運動方法学演習1	前期
10	生理学	前期
11	ウエルネスと医学	前期
12	運動方法学演習3	前期
13	運動方法学演習4	前期
14	解剖学	前期

表 2 1 全学共通カリキュラム

グループ1

No.	科目名	学期
1	現代社会と人間	前期
2	論理的思考法	前期
3	歴史と資料	前期
4	聖書と人間	前期
5	歴史と現代	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	音楽と社会	前期
2	文学と歴史	前期
3	文学と社会	前期
4	江戸と文学	前期
5	文学と人間	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	現代社会と人間	前期
2	聖書と人間	前期
3	歴史と社会	前期
4	多文化の世界	前期
5	多文化の世界	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	パーソナリティの心理	前期
2	癒しの科学	前期
3	対人関係の心理	前期
4	認知・行動・身体	前期
5	からだの科学	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	現代社会とツーリズム	前期
2	現代社会とツーリズム	前期
3	経営学の世界	前期
4	マイノリティと宗教	前期
5	福祉と人間	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	身体コンディショニング論	前期
2	心の健康	前期
3	高齢化社会におけるヒトの弱点と予防法	前期
4	レジャー・レクリエーションと現代社会	前期
5	心の科学	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	アジアと平和	前期
2	北京オリンピックを考える	前期
3	日本国憲法	前期
4	平和とは何か	前期
5	多文化共生と平和	前期

グループ9

No.	科目名	学期
1	都市環境と人	前期
2	地球の理解	前期
3	生物の多様性	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	表象文化	前期
2	乱歩再発見	前期
3	美術の歴史	前期
4	表象文化	前期
5	外国文学とキリスト教	前期

グループ10

No.	科目名	学期
1	生命倫理とキリスト教	前期
2	地球環境の未来	前期
3	生命操作と人権	前期

教育調査の検討グループ（2009年10月現在）

座長	菊地	進	（総長補佐、経済学部）
	白石	典義	（経営学部長）
	東條	吉純	（教務部副部長、法学部）
	塚本	伸一	（入学センター長、現代心理学部）
	山口	和範	（全学共通カリキュラム運営センター部長、経営学部）
陪席	元治	恵子	（ビジネスデザイン研究科）
事務局	石田	和彦	（企画部企画課）
	今田	晶子	（大学教育開発・支援センター）
	伊藤	直子	（大学教育開発・支援センター）

2008年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	藤原	新	（教務部副部長、経済学部）
	毛谷村	英治	（観光学部）
事務局	今田	晶子	（大学教育開発・支援センター）
	伊藤	直子	（大学教育開発・支援センター）
	間中	賢治	（教務事務センター）
	芝田	貴史	（新座キャンパス事務部教務課、2008年9月まで）
	増田	絵里子	（新座キャンパス事務部教務課、2008年10月から）

2008年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2009年10月発行

編集 立教大学 2008年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 株式会社 ナナオ企画

〒104-0043 東京都中央区湊 1-6-11

TEL 03-3297-2805 FAX 03-3297-2807